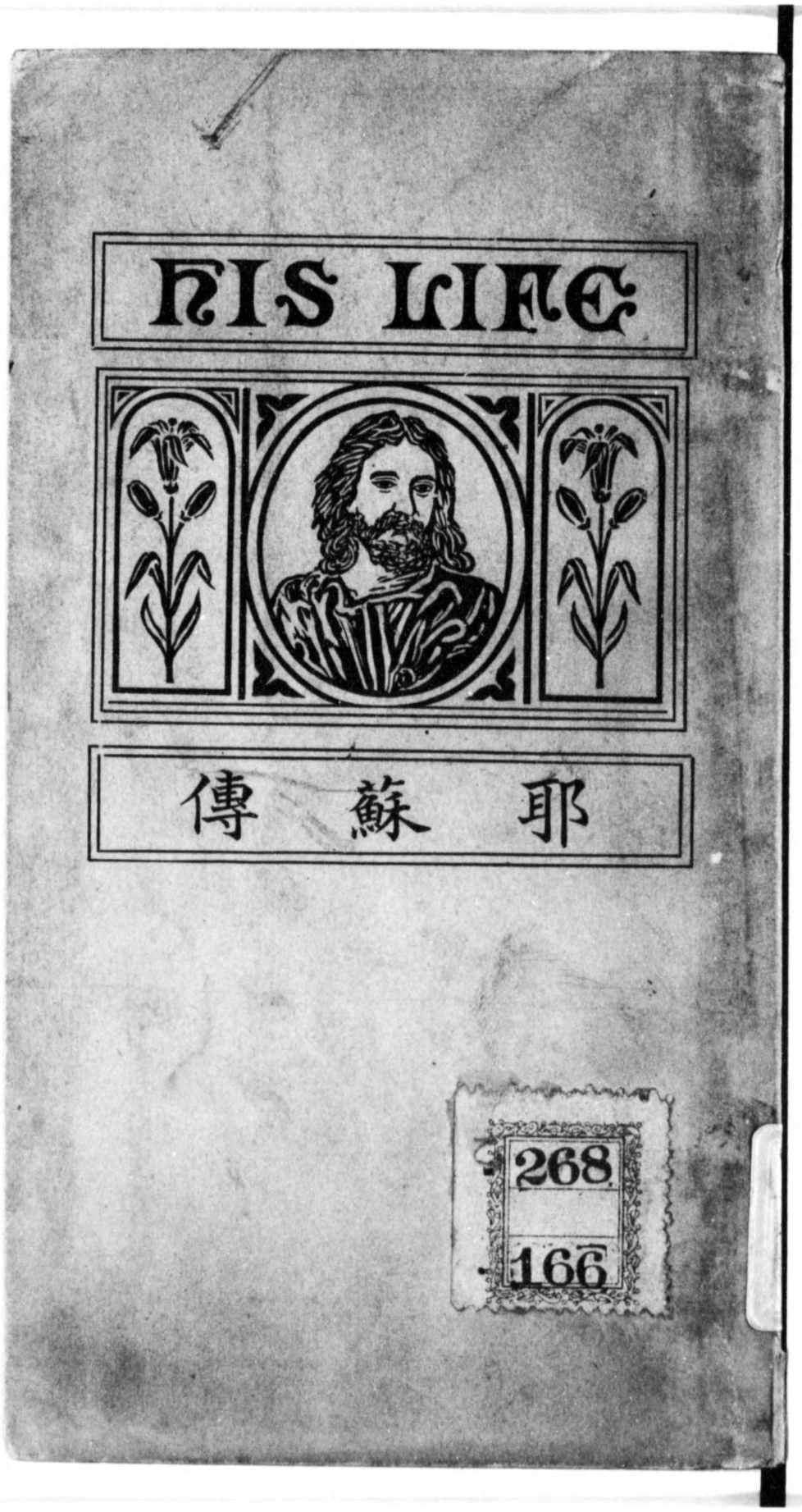

021377−000−1

特30−504

耶蘇伝

教文館編輯部／編

M44

ABI−1270

特30号
504

聯合國圖書館
東京

教文館編輯部編

蘇傳

教文館藏版

明治
44. 7. 6
内交

序

世に基督傳多し。されど四福音書にまさる基督傳出づべけんや。四福音書は實に基督教の源泉也。四福音書なければ、基督も基督教も其の眞正なる光明を失ふに至るべし。保羅の書翰はなくも可なり、然れ共四福音書は基督教にとりて一日も缺くべからざる也。

四福音書は各それ自身の方法を以て基督とその事業とを語れり。四人四色の基督觀吾人はその一つをも失ふを欲せず、その對照頗る趣味あり。されどこの四を合はせて一つとなして見ば、基督の生涯の發展事業の聯絡を見るに、甚だ便宜ならんと想ふは、これ吾人が必然の要求也。故を以て、紀元後百七十三年、既に己に敬虔な

る學者タチサアンはこの企をなせり。彼の書は實に後世斯る企の範を垂れしなりき。吾人のこの編をなすや、亦一般の讀者に基督の生涯の全景を明かならしめんとする微衷に外ならず。四福音書を讀むの旁合はせてこの書を讀まば、益する所なしとせんや。

明治四十四年六月一日

編者しるす

耶蘇傳

目次

誕生と少時

神の告示……一

肉となれる聖言……三

洗禮者ヨハネ約束の誕生……五

天使マリアに來る……七

マリア從姉を訪ぬ……

目次

マリアの歌……八
洗禮者ヨハネの誕生……一〇
ザカリアの歌……一一

耶蘇の誕生と幼時

ヨセフとマリア……一三
耶蘇の誕生……一五
天使と牧羊者……一六
割禮……一七
殿詣……一八
博士の訪問……二〇

埃及に出奔す……二二

ナザレの生活

ナザレに還る……二四
エルサレムに往く……二五
沈默の十八年……二六

傳道の初期

野に呼べる聲……二七
耶蘇の洗禮……三〇

目次

荒野の誘惑……三一
ヨハネの證言……三三

信仰の元始

ヨルダン河畔最初の弟子……三六
最初の奇蹟……三九

エルサレムにおける耶蘇

父の家を潔む……四一
ニコデモの來訪……四二

神國建設の準備

耶蘇の施洗と說教……四五
ヨハネの謙讓……四六
ヤコブの井戸……四七
サマリア人に傳道……五一

滿々たる高潮

ガリラヤにおける耶蘇

洗禮者ヨハネ囚はる……五三
ガリラヤ人耶蘇を迎ふ……五四
貴人の子癒ゆ……五五

目次

漁人を召す……五六
カペナウムの善行の一日……五八
癩者癒ゆ……六〇

爭論の始め

癲瘋の者癒ゆ……六二
稅吏の弟子……六四
新と舊と……六五
エルサレムにて安息日に癒す……六六
安息日に穗を摘む……七二

招かる者多く選ばる者尠なし

弟子の群衆……七三
十二人の選擇……七五

神國の教訓

神國の民……七六
神國の義……七八
僞善の罪……八三
只神に賴れ……八五
愛の判斷……八八

目次

祈禱……八九
至誠……九〇

ガリラヤ旅行

百人の長の篤信……九三
寡婦の子を蘇らす……九四
洗禮者ヨハネの疑問……九五
耶蘇の洗禮者ヨハネ觀……九六
洗禮者ヨハネの死……九八
悔改めたる婦……一〇〇
隨伴の婦人達……一〇二

高木の風

耶蘇の同胞兄弟……一〇三
永遠の罪の誡……一〇四
三休徴の要求……一〇六

神國の譬

種まく者……一〇八
毒麥……一一二
長てる種……一一二
芥種……一一三
麪の種……一一三

目次

譬の解……一一四
隱れし寶……一一五
眞珠……一一五
魚の網……一一六

湖畔奇蹟の一日

耶蘇暴風を靜む……一一七
惡鬼……一一八
瀕死の兒と惱める婦……一二〇
途上病を癒す……一二四

ガリラヤに福音擴がる

鄉里を訪ふ……一二六
村々にて敎ふ……一二九
十二人を送る……一二九

カペナウムの危機

五千人を養ふ……一三六
耶蘇湖上を步む……一三九
人民の失望……一四一
傳習の拒否……一四七
パリサイ人の陰謀……一五〇

耶蘇の隱退

ガリラヤ外の傳道
ホエニシアに往く……一五二
奇蹟と衆人……一五四
四千人を養ふ……一五五
表徴の要求……一五七
何ぞ悟らざるや……一五八
盲人を癒す……一五九
救主耶蘇
ペテロの告白……一六〇
十字架の預告……一六一

變貌……一六三
癲癇の子供……一六五
十二人の訓練
再び十字架の預告……一六八
最も大なる弟子……一六九
赦罪に就て……一七二
納金……一七四
エルサレムに向ふ
ガリラヤより最後の出立

目次

秋風起る……一七六
感謝せるサマリヤ人……一七七
新參者への訓誡……一七八
エルサレムに於て
構廬の節における耶蘇……一八〇
耶蘇と不義なる婦……一八五
世の光……一八七
心靈の自由……一九〇
ペレア傳道

七十人の使命……一九五
七十人還る……一九六
柔和と謙讓……一九七
悔改めざる市……一九八
善きサマリア人……一九九
再びエルサレムに於て
ベタニヤの友人……二〇〇
エルサレムの奇蹟……二〇一
善き牧羊者……二〇六
修殿節における耶蘇……二〇九

目次

再びペレア傳道

耶蘇とパリサイ人……二一一
遺産爭ひの誡……二一三
塔の墜落……二一四
安息日の使用法……二一五
救拯問題……二一六
ヘロデの殺意……二一七
阱に陷ちたる牛……二一八
莚の首席……二一九
神國の莚……二二〇

費用を算へよ……二二一
九十九の羊……二二二
失はれたる金……二二三
放蕩兒……二二四
不義なる番頭……二二六
吝嗇者の譬……二二八
『我儕の信を增せ』……二三〇
エルサレム附近
ラザロの復活……二三一
會議の決議……二三七

目次

エフライムに退去
神國の出現……二三八
不義なる裁判官……二四〇
パリサイ人と稅吏……二四一
離婚に就て……二四二
耶蘇と稚兒……二四三
富める青年……二四四
葡萄園の譬……二四六
エルサレムに最後の旅
十字架の影……二四八

雷の子……二四九
エリコの盲人……二五一
ザアカイを訪ふ……二五三
金錢の譬……二五四
エルサレムに赴く……二五六
ベタニヤの宴……二五六
最後の一週間
日曜(凱旋の日)
凱旋のホザナ……二五八

目次

月曜(權威の日)
無花果樹を呪ふ……二六三
神殿を潔む……二六三
火曜(爭論の日)
萎める無花果樹……二六五
其督の權威に就て……二六六
諫告の三喩……二六七
(一)二人の息子……二六七
(二)惡しき農夫……二六八
(三)王子の結婚……二七〇

耶蘇に對する三大質問……二七一
(一)貢金……二七一
(二)復活に就て……二七二
(三)最大なる命令……二七四
耶蘇の質問……二七五
耶蘇の抗論……二七六
寡婦の賽錢……二八一
異邦人耶蘇を索ぬ……二八二
猶太人耶蘇を拒む……二八四
將來に關する論議……二八七

目次

弟子等への三教訓……二九四
(一)十人の童女の譬……二九四
(二)銀錢の譬……二九五
(三)最終の審判の狀態……二九八
耶蘇に對する陰謀……三〇〇
水曜(退隱の日)
木曜(友誼の日)
逾越の準備……三〇一
弟子等の競爭……三〇二
耶蘇弟子等の足を洗ふ……三〇三

耶蘇を賣る者……三〇六
主の晩餐……三〇八
告別の辭……三〇九
(一)相愛の訓……三〇九
(二)爾曹礙かん……三一〇
(三)最後の用意せよ……三一一
(四)『我は途なり眞理なり生命なり』……三一二
(五)『我は眞正の葡萄樹なり』……三一六
(六)『我既に世に勝てり』……三二三
仲保の祈禱……三二四

目次

金曜(苦惱の日)
ゲッセマネのなやみ……三二八
裏切と逮捕……三三〇
訊問……三三三
ペテロの拒絶……三三七
ピラトに渡さる……三三六
ユダの悔恨……三三八
ピラトの前にて……三三九
ヘロデの前にて……三四二
再びピラトの前にて……三四三

悲しき途上……三四八
十字架……三四九
埋葬……三五六
土曜(沈默悲哀の日)
墓を守る……三五八

耶蘇の復活

日曜(復活の日)
地震……三五九
空虛の墓……三五九
マリアに現はる……三六〇

目次

婦たちに現はる……三六二
守兵の報告……三六三
エマオに現はる……三六四
弟子等に現はる……三六七
復活日の後
弟子等とトマスに現はる……三六八
海上七人に現はる……三七〇
山上十一人に現はる……三七四
最後の出現と昇天……三七四
跋……三七六

耶蘇傳目次終

耶蘇傳

誕生と少時

神の告示

肉となれる聖言

太初に道あり、道は神と偕にあり、道は即ち神なり。この道は太初に神と偕に在りき。萬物これに由りて造らる、造れたる者に一として之に由らで造れしはなし。之に生あり、此生は人の光なり。光は暗に照り、暗は之を曉らざりき。

偖こゝに神の遣し給へるヨハネと云る者あり。その來りしは證の爲なり。即ち光に

就て證を作し、すべての人をして己に因りて信ぜしめんが爲なり。彼は光に非ず、光に就て證を作ん爲に來れり。夫すべての人を照す眞の光は世に來れり。かれ世にあり世は彼に造れたるに、世これを識ず。かれ己の國に來しに其民これを接ざりき。彼を接けその名を信ぜし者には權を賜ひて此を神の子と爲り。斯る人は血脈に由に非ず、情慾に由に非ず、人の意に由に非ず、唯神に由て生れし也。

それ道肉體と成て、我儕の間に寄れり。我儕その榮を見に、實に父の生たまへる獨子の榮にして、恩寵と眞理にて充り、ヨハヂ之が證を作て呼いひけるは、我さきに我に後れ來らん者は、我より優れる者なり。蓋我より先に在し者なれば也と言しは此人なり。我儕みな彼に充滿たる其中より受て、恩寵に恩寵を加らる。律法はモーセに由て傳り、恩寵と眞理はイエスキリストに由て來れり。未だ神を見し人あらず、惟うみ給へる獨子、すなはち父の懷に在る者のみ之を彰せり。（約翰一〇一一一八）

洗禮者ヨハヂ誕生の約束

ユダヤの王ヘロデの時に、アビアの班なる祭司ザカリアと云る者あり。其妻はアロンの裔にて名をエリサベッと云ふ。共に神の前にて義人なり。凡て主の誡命と禮儀を虧なく行へり。エリサベッ姙なきが故に、彼等に子なし。又二人とも年も老ぬ。

ザカリアその班次に値て、神の前に祭司の職を行ふ時、祭司の例に從ひ、籤を抽て主の殿にいり、香を燒ことを得。香を燒ける時に衆の人々はみな外に居て祈れり。

主の使者香壇の右に立て、ザカリアに現れしかば、ザカリア之を見て驚懼る。

天使彼に曰けるは、ザカリアよ懼るゝ勿れ、爾の祈禱すでに聞きたまへり、爾の妻エリサベッ男子を生ん、其名をヨハヂと名くべし。爾に喜と樂みあらん。多の人

も亦その生るゝに因て悅び有ん。それ此子主の前に大ならん。又葡萄酒と濃酒とを飲まじ、母の胎より生れ出て聖靈に充さる。又イスラエルの民の多の人を主なる其神に歸す可れば也。彼れエリヤの心と才能を以て主の先に行ん。これ父の心に子を慈はせ、逆れる者を義人の智に歸せ、主の爲めに新なる民を備へんとなり。

ザカリア天使に曰けるは、我すでに年老ゆ、妻もまた年邁めり、何に因てか此事あるを知ん。

天使こたへて曰けるは、我はガブリエルとて神の前に立つものなり、爾に語りて、この喜の音を告ん爲めに遣されたり。其時いたりて必ず成るべき我が言を信せざるに因り、なんぢ瘖となりて、此の事の成る日まで言ふことは能はじ。

民はザカリアを俟ゐて、其殿の内に久しきを異しむ。ザカリア出て、言ふこと能はざりしかば、彼等其殿の内にて異象を見たる事を曉たり。ザカリア衆人に首を以て示めし、竟に瘖となれり。

その職事の日滿ければ、彼は家に歸りぬ。

此後その妻エリサベツ孕みて隱れをりしこと五ケ月にして、曰ひけるは主わが恥を人の中に灑せん爲に、眷顧たまふ時は、此の若く我に爲せり。（路加一〇五―廿五）

天使マリアに來る

恰も此の六ケ月に當り、ガブリエルといふ天使は、ガリラヤのナザレと名けたる邑のダビデの家のヨセフと云へる人の聘定せし處女に、神より遣されたり。其處女の名はマリアと云へり。天使この處女に來りて曰けるは、慶し、惠るゝ者よ、主なんぢと偕に在す、爾は女の中にて福なる者なり。

處女はその言を訝りて、この問安は如何なることにやと案ぜり。

天使いひけるはマリアよ懼るゝ勿れ、爾は神より惠を得たり。爾孕みて男子を生まん。其名をイエスと名くべし。かれ大なる者となりて至上者の子と稱られん。又主たる神その先祖ダビデ王の位を彼に予ふれば、ヤコブの家を窮なく支配すべく、且その國終ること有ざるべし。

マリア天使に曰けるは、我いまだ夫に適ざるに如何にして此事ある可きや。

天使こたへて曰けるは聖靈なんぢに臨る、至上者の大能なんぢを庇はん。是故に爾が生むところの聖なる者は神の子と稱へらるべし。それ爾の親戚エリサベッ、彼も年老て男子を孕めり、素石婦と言れたりしが、今すでに孕みて六ケ月になりぬ。それは神に於ては能ざる事なければ也。

マリア曰ひけるは、見よ、我は主の使女なり。爾の言へる如く、我にあれかして天使遂に彼を去れり（路加一〇廿六―廿八）

マリア從姉を訪ぬ

當時マリア起ちて、山地なるユダの邑に急ぎ往き、ザカリアの家に入りて、エリサベッに問安したり。エリサベッはマリアの問安を聞きし時、其の胎兒腹の內にて跳動たり、エリサベッ聖靈に感され、大聲に呼びいひけるは女の中にて爾は福なる者なり、亦宿れる所の者も福なり。わが主の母われに來る、われ何に由りてか此の事を得し、夫れなんぢの問安の聲わが耳に入しとき、胎兒よろこびて我が腹の中に跳れり。主の言を信ぜし者は福なり。そは主の語りたまひし如く必ず成るべければ也。

マリアの歌

マリア曰ひけるは、

『わが心主を崇め、
わが靈はわが救主なる神を悅ぶ。
そはこの使女の卑しきをも顧りみたへばなり。
見よ、今より後、萬世までも、我を福なる者と稱へらるべし。
それ權能ある者われに大なる事をなせり。
その名は聖く、
その矜恤は世々かれを畏るゝ者に及ばん。
彼は腕の力を發して心の驕る者を散し、
權柄ある者をその位より下し、
卑しき者を擧げ、
飢たる者に美食を飽せ、
富める者を空しく返らせたまふ。
その僕イスラエルに扶助をたまひて、
アブラハムとその子孫を窮りなく、
憐れむを忘れざること、
われらの先祖に言ひたまへる如し。』

（路加一〇四）
（六―五六）

マリアはエリザベッと偕に居ること、三ケ月ばかりにして、おのが家に歸りたりき。

洗禮者ヨハネの誕生

偖エリサベツ産期みちて男子を生り。その隣里の者また親戚のもの、主がエリサベツに大なる慈悲を垂たまひし事を聲て、偖に喜べり。

第八日に及びければ、彼等その子に割禮せんとて來り、父の名に因りてザカリアと名んとせり。

其母こたへて、然すべからず、ヨハネと名くべしと言へり。

彼等エリサベツに對て、曰ひけるは爾が親戚の中には此名を名づけし者なし。

彼ら遂に其父に頭にて示して、いかに名けんと欲ふか問ねけり。

ザカリア寫字板を請めて、其名はヨハネと書しるせしかば皆奇しめり。

ザカリアの口直ちに啓けて、舌とけ、物言ひて、神を頌めたり。

その隣里に住たる人々みな懼れぬ。又すべて此事を徧くユダヤの山地に傳播せり。聞くもの皆これを心に藏めて、此子は如何なる者にか成らんと言へり。

主の手は彼と供に在りき。（路加一〇五—七六）

ザカリアの歌

父ザカリア聖靈に充されて預言して曰ひけるは、

『主なるイスラエルの神は讃むべきかな。

彼はその民を顧りみて、贖をなし、

我儕のために其僕ダビデの家に、

救拯の角を挺てたまへばなり。

そは古より聖なる預言者の口を以て言ひたまへし如し。

即ち我儕を敵および凡て我儕を憎む者の手より脱すべき救拯なり。

こは仁惠を我儕の先祖に施し、又その聖約を忘れじとなり。

これ我儕の先祖アブラハムに立てしところの誓にして、

我儕を敵の手より救ひ、

我儕の生涯を聖と義に於いて、

懼れなく主に事へしめんとなり。

嬰兒よ、爾は至上者の預言者と稱へられん。

そはなんぢ主に先だちて行き、その路を備へんとすればなり。

神の深きあはれみによりて、

その罪を救されて、

救はれんとを其民に示さんためなり。

そのあはれみによりて、旭の光、

上より、幽暗と死の蔭に住める者を照し、

我儕の足を導きて、平和なる路に至らせんとて臨めり。

斯くて嬰兒は漸成長し、精神ます〳〵強健にして、イスラエルに顯るゝ日まで野に居れり。（路加一〇六、七—八十）

耶蘇の誕生と幼時

ヨセフとマリア

それイエスキリストの生れ給ること左の如し。其母マリアはヨセフと聘定を爲せる

のみにて、未だ偕にならざりしとき、聖靈に感じて孕しが、其孕みたること顯れけり。夫ヨセフは義人なる故に、之を辱しむることを願まず、密に離縁せんと思へり。

斯くて此事を思念せる時に、主の使者かれが夢に現れて曰けるは、ダビデの裔ヨセフよ、爾の妻マリヤを娶ることを懼るゝ勿れ。その孕める所の者は聖靈に由るなり。かれ子を生ん。其名をイエスと名くべし。蓋その民を罪より救はんとすれば也。

凡て此事は預言者によりて、主の言ひたまひし言に、應はせんが爲なり。曰く、

『見よ、處女はらみて子を生まん。
その名をインマヌエルと稱ふべし。』

その名を譯けば、神われらと偕に在りとの義なり。

ヨセフ寢より起きて、主の使者の命ぜし言に遵ひ、其妻を娶りたれど、冢子の生るゝまで、牀を同にせざりき、其の生れし子をイエスと名けたり。（馬太一〇一八—廿五）

耶蘇の誕生

當時天下の戸籍を査ぶる詔命、カイザルアウグストより出たり。この戸籍調査はクレニオのスリヤを管理し時、初めて行はれたりし也。人みな戸籍に登んとて、各その故邑に歸たり。ヨセフもダビデの宗族又血統なれば、戸籍に登んとて、已に孕める其聘定の妻マリアと共に、ガリラヤの邑ナザレより出て、ユダヤに上り、ダビデの邑ベテレヘムといふ所に至れり。

玆に居りて產期滿ちければ冢子を生み、それを布に裹みて、槽に臥せたり。此は客

舍に彼等の居る處なかりしが故なり。（路加二〇一—七）

天使と牧羊者

近傍に羊を牧ふもの有りけるが、野に居りて夜間その群を守たりしに、主の天使きたりて、主の榮光かれらを環照しければ、牧者おほいに懼たり。

天使これに曰けるは、懼ること勿れ、われ萬民に關はりたる大なる喜の音を爾曹に告べし。それ今日ダビデの邑に於て、爾曹の爲めに救主うまれ給へり。是主たるキリストなり。爾曹布にて裹みし嬰兒の槽に臥たるを見ん。これ其徵なり。

倏ち衆の天軍あらはれ、天使と共に神を讃めて曰く、

『いと高きところには、榮光神にあれ。
地には平和、人には恩澤あれ。』

天使等かれらを離れて天に行きければ、羊を牧ふもの互に曰ひけるは、いざベテレヘムにゆき、主の示めし給へる、その有りし事を見ん。

彼等急ぎ至りて、マリアとヨセフまた槽に臥したる嬰兒に尋ね遇へり。既に見て、此子につき、天使の語りし妻を傳播めり。

聞く者皆羊を牧ふ者の語れる事を奇みたり。

マリアは凡べて此等の言を心に記めて、想ひめぐらしぬ。

羊を牧ふ者その見聞せる所みな己に語られし所の如くなるによりて、神を崇めかつ讃めて返れり。（路加二〇八—廿）

割禮

子に割禮を行ふべき、八日の日いたりければ、其のいまだ胎に寓ざる先に天の使者

の稱へし如く、その名をイエスと稱へたり。（路加二〇廿一）

殿詣

モーセの律法に循ひて、潔の日滿ければ、嬰兒を携て主に獻んが爲め、エルサレムに上れり。是れ主の例に初めに生るゝ男子は主の聖者と稱ふべしと錄されたるが如し、また主の律法に、斑鳩一雙あるひは雛鴿二を獻ふべしと言るに循ひて、祭を行ん爲めなり。

偖てエルサレムにシメオンと云へる人あり。斯人は義しくかつ敬みありて、イスラエルの民の慰められん事を俟る者なり。聖靈その上に臨れり。また主のキリストを見ざる間は死なじと聖靈にて示さる。かれ聖靈に感じて、神殿に入れり。兩親その子イエスを律法の例に循ひて行はんと携來りしに、シメオン嬰兒を抱き、神を

讃めていひけるは、

『主よ、今なんぢはその言に從ひて、僕を安らかに世をば逝らせたまふ。わが目すでに万民の前に、設けたまひし救を見たり。これ異邦人を照さん光なり。また爾の民イスラエルの榮なり。』

その父母は嬰兒に就て語られる事を奇みをれり。又シメオン彼等を祝ひて、其母マリアに言へり。

『見よ、この嬰兒はイスラエルの多くの人の頽びて又興らん事と、

言ひ逆ひを受くる其の表號に立てらる。

これ衆の心の想ひの露はれんためにして、

劍なんぢが心を刺し透すべし。』

アセルの支派、パヌエルの女にアンナと云へる預言者あり。彼はいと老邁なり。其處女なりしとき、夫に適て七年ともに居りたり。この老女は齡おほよそ八十四歳の嫠婦なりしが、殿を離れず、夜も晝も斷食と、祈禱をなして神に事ふ。此時この老女も側に立ちて主を讃美し、亦エルサレムにて贖を望める凡ての人に此子の事を語れり。（路加二〇廿二—廿八）

博士の訪問

夫れイエスはヘロデ王の時、ユダヤのベテレヘムに生れ給ひしが、其とき博士たち東の方よりエルサレムに來り、曰ひけるは、ユダヤ人の王とて生れ給へる者は何處に在すや。われら東の方にて其星を見たれば、彼を拜せん爲めに來れり。

ヘロデ王これを聞て痛む。エルサレムの民もみな然り。凡の祭司の長と民の學者とを集めて、ヘロデ問ひけるは、キリストの生るべき處は何所なるや。答へけるはユダヤのベテレヘムなり。蓋預言者の錄されたる言に、

『ユダヤの地ベテレヘムよ、

爾はユダヤの郡中にていと小さきものに非ず。

我がイスラエルの民を牧ふべき君、

その中より出でんと云へばなり。』

是に於てヘロデ密に博士等を召び星の現れし時を詳に問ひて、彼等をベテレヘムに

遣さんとして曰ひけるは、往きて嬰兒の事を細に尋ね、これに遇はば我に告げよ、我も亦ゆきて拜すべし。

かれら王の命を聞て往り。前に東の方にて見たりし星、かれらに先ちて嬰兒の居所にいたり其上に止りぬ。彼等この星を見て甚く喜び、既に室に入ければ、嬰兒の其母マリヤと偕に居るを見、ひれふして嬰兒を拜し、寶の盒を開きて黃金乳香沒藥など禮物を獻たり。

博士夢にヘロデへ返る勿との默示を蒙りて、他の途より其國に歸れり。（馬太二〇一—十一）

埃及に出奔す

彼等が去れるのち、主の使者ヨセフの夢に現れて曰ひけるは、ヘロデ嬰兒を索めて殺さんとする故に、起て嬰兒と其母とを挈へ、エジプトに逃れて復わが爾に示さん

時まで彼處に止れ、ヨセフ起て夜嬰兒と其母とを挈へエジプトに往き、ヘロデの死るまで其所に止れり。是れ主預言者に託て、我わが子をエジプトより召出せりと云ひ給ひしに應せんため也。

茲に於てヘロデ博士に欺かれたるを知り、大に怒り、人を遣して博士に詳しく問ひたる時を度り、ベテレヘムと其境の內なる二歲以下の嬰兒を盡く殺せり。即ち預言者エレミヤの言に、

『歎き悲しみ、いたく憂ふる、
聲ラマに聞ゆ。
ラケルその子供を歎き、
その子供のなきによりて慰めを得ず。』

と云ひしに應へり。（馬太二〇十三—十八）

ナザレの生活

ナザレに還る

ヘロデ死にしかば、主の使者ヨセフの夢にエジプトにて現はれ、曰ひけるは、起て嬰兒とその母とを挈へ、イスラエルの地にゆけ、嬰兒の生命を索る者は已に死り。彼は起ちて嬰兒と其母とを挈へて、イスラエルの地に至れり。

アケラヲ父ヘロデに代て、ユダヤの王たりと聞きければ、彼處に往くことを懼る。又夢に告を蒙りてガリラヤの内に避け、ナザレと云へる邑に至りて居れり。彼はナザレ人と稱れんと預言者に託て云れたる言に應せん爲めなり。（馬太二〇十九—廿三）

其子や丶成長して、精神強健に知慧みち、神の恩寵その上に臨り。（路加二〇四十）

エルサレムに往く

偖その兩親年毎に逾越の節筵にエルサレムに往きしが、彼の十二歳の時、また節筵の例に循ひエルサレムに上れり。節筵の日卒て返往けるに、其子イエスエルサレムに留りぬ。然るにヨセフと母これを知ず。同行人の中に在るならんと意ひ、一日程を行きて親戚知音の者に尋ねしが、遇はざりければ、彼を尋ねてエルサレムに返れり。

三日ののち殿にて遇ふ。かれ教師の中に坐し、且聽きかつ問ひゐたり。聞く者みな其知慧と其應對とを奇とせり。

兩親これを見て駭き、母かれに曰ひけるは、子よ何ぞ我儕に如此行たるや、爾の父

と我と憂へて爾を尋たり。

イエス答へけるは、何故われを尋るや。我は我父の事を務べきを知ざる乎。

されど兩親はその語るとを曉らず。（路加二〇四一—五十）

沈默の十八年

イエスこれと共に下り、ナザレに歸りて彼等に順ひ居れり。其母これらの凡ての事を心に藏めぬ。

イエスは知慧も齡もいやまさり、神と人とに益〻愛せられたり。（路加二〇五一—五二）

傳道の初期

耶蘇と洗禮者ヨハネ

テベリオカイザル在位の十五年に、ポンテオピラトはユダヤの方伯となり、ヘロデはガリラヤの分封の君と爲れり、其兄弟ピリポはイツリア及テラコニテの地の分封の君となり、ルサニアはアビレネの分封の君と爲れり。アンナスとカヤパ祭司の長と爲りたりし時、サカリアの子ヨハネ野に居りて神の言葉を受けたり。（路加三〇—一—三）

野に呼べる聲

此のヨハネは身に駱駝の毛衣を着、腰に皮の帶をつかね、蝗蟲と野蜜を食へり。（馬可一〇六）

ヨルダンの邊なる四方の地に來り、罪の赦を得させんが爲めに、悔改のバプテスマを宣傳たり。（路加三〇三）曰ひけるは、天國は近づけり、悔改めよ。（馬太三〇二）

こは預言者イザヤが斯く言ひし人なり。

『主の道を備へ、
その路線を直くせよと、
野に呼べる人の聲あり。（馬太三〇三）
諸ての谷は埋められ、
諸の山崗は夷げられ、
屈曲たるは直く、
崎嶇は易くせられ、
人々みな神の救を見ることを得ん。』（路加三〇五―六）

ユダヤの全國およびエルサレムの人々、かれに來りて各々その罪を告白はし、ヨルダンといふ河にてバプテスマを受けたり。（馬可一〇五）

バプテスマを受けんとてパリサイ及びサドカイの人々の多く來れるを見て、彼等に曰ひけるは、蝮の裔よ、誰かなんぢらに來らんとする怒を避くべきことを告げしや。然れば悔改に符ふ果を結べよ。

爾曹われらが先祖にアブラハム有りと云ふ事を意ふ勿れ。我爾曹に告げん神は能く此石をもアブラハムの子と爲らしめ給ふなり。今や斧を樹の根に置る。故に凡て善果を結ざる樹は斫れて火に投入らるべし。（馬太三〇七―十）

衆人ヨハネに問ふて曰ひけるは、然ば我儕何を爲べき乎。答へて曰ひけるは二の衣服を持てる者は持たぬ者に分與よ。食物を持てる者も亦然すべし。

稅吏もバプテスマを受けんとて來り、曰ひけるは、師よ我儕は何を爲すべきか。答へて曰ひけるは、定例の稅銀の外に多く取こと勿れ。

兵卒も亦問て曰けるは我儕は何を爲べきや。答て曰ひけるは人を强暴し、或は誣訴ふることを爲すなかれ。得るところの給料を以て足れりと爲すべし。

民壞望し時なれば、衆人みな心に、ヨハネをキリストなるや否やと忖度たりしに、ヨハネ之に答へいひけるは、我は水を以てバプテスマを爾曹に施へり。我より能力ある者きたらん。我は其履帶を解くにも足ず、彼は聖靈と火を以てバプテスマを爾曹に施はん、手には箕を持ちて、其禾場を潔め、麥は斂て其藏にいれ、殼は滅ざる火にて燒べし。

ヨハネまた多端を以て勸をなし、福音を民に宣傳へたり。（路加三〇十—十八）

耶蘇の洗禮

當時（馬可一〇九）民みなバプテスマを受けたるに、イエスもまた（路加三〇廿一）バプテスマを受けんとて、ガリラヤの「ナザル」（馬可一〇九）よりヨルダンに來り給ふ。（馬太三〇一三）

ヨハネ辭みて曰けるは、我は爾よりバプテスマを受くべき者なるに、爾反つて我に來る乎。

イエス答へけるは、暫く許せ、斯く凡ての義しき事は我儕盡すべきなり。

是に於てヨハネ彼に許せり。イエスバプテスマを受けて水より上れるとき、天忽ち之が爲めにひらけ、神の靈の鴿の如く降りて其上に來るを見る、又天より聲ありて、此は我が心に適ふわが愛子なりと云へり（馬太三〇一七、四一一七）

荒野の誘惑

偖てイエスは「直ちに」（馬可一〇十二）聖靈に導かれ、惡魔に試みられんために野に往き（馬太四〇一）、獸と共にをりて（馬可一〇一三）、その間なにをも食はざりき（路加四〇二）。四十日四十夜

斷食の後、餓たり（馬太四〇二）

試むる者かれに來りて、曰ひけるは、爾もし神の子ならば命じて此石をパンと爲よ。

イエス答へけるは、人はパンのみにて生るものに非ず。唯神の口より出る凡の言に因ると錄されたり。

是に於て惡魔かれを聖京に携へゆき、殿の頂上に立せて曰けるは、爾もし神の子ならば己が身を下へ投げよ。蓋なんぢが爲めに神その使等に命ぜん。彼等手にて支へ、爾が足の石に觸ざるやうすべしと錄されたり。

イエス彼に曰ひけるは、主たる爾の神を試むべからずと亦錄せり）

惡魔また彼を最高き山に携へゆき、世界の諸國とその榮華とを見せて、爾もし俯伏て我を拜せば、此等を悉なんぢに與ふべしと言ふ。

イエス彼に曰ひけるは、サタンよ退け主たる爾の神を拜し、惟之にのみ事ふべしと錄されたり。

斯くして惡魔この試惑をみな畢りて、暫く彼を離れたり（路加四〇十三）。見よ、天の使たち來りて之に事ふ（馬太四〇十一）。

ヨハ子の證言（約翰一〇一九―三四）

ユダヤ人祭司とレビの人をエルサレムよりヨハ子の所に遣し、爾は誰ぞと問しめけるとき、證せること左の如し。かれ諱す所なく言顯して、我はキリストに非ずと明かに言へり。

また問ひけるは、『然らば誰ぞ、エリヤなるか』。

否と答ふ。

爾は彼の預言者なるかと問ひしに、然らずと答へたり。

是に於て彼等また問ひけるは、爾は誰なるか、我儕を遣し丶者に我儕が答を爲し得るやう我儕に告よ、爾みづから、如何に謂ふや。

ヨハヲ曰ひけるは、我は即ち主の道を直せよと野に呼る人の聲なり、預言者イザヤの言るが如し。

その遣されたる人々はパリサイの人なりき。彼等又ヨハヲに問ふて曰ひけるは、然ば爾はキリストに非ず、エリヤに非ず、彼の預言者にも非ずして、何ぞバプテスマを施すか。

ヨハヲ答へて曰ひけるは、我は水を以てバプテスマを授く、然ど爾曹が知ざる所の

もの一人爾曹の中に立てり。我に後れ來りて、我に優れる者とは是なり。我は其履の紐を解にも足ざる者なり。

此事はヨハヲのバプテスマを施し丶ヨルダンの外なるベタニヤにて有りし也。

明日ヨハネイエスの己に來るを見て、曰ひけるは世の罪を任ふ神の羔を觀よ、我に後れ來らん者は、我より優れる者なり。蓋我より以前に在し者なれば也と我言しは此人也。われ素より此人を識ず。然れど我來りて、水にてバプテスマを施すは、彼をイスラエルの民に顯さんが爲なり。

ヨハヲまた證して曰ひけるは、われ靈の鴿の如く天より降りて、其上に止れるを見たり。我は彼を識ざれど我を遣はし水にてバプテスマを施さしめし者、われに曰けるは、爾靈くだりて其上に止まるを見ん。彼は聖靈を以てバプテスマをなす者なり。

我これを見て其神の子たるを證せり。

信仰の元始

ヨルダン河畔最初の弟子

明日またヨハネ二人の弟子と偕に立ち、イエスの行くを見て、神の羔を觀よと曰ふ。

如此いへるを弟子聞きてイエスに從ひ往けり。

イエス彼等の從へるを回顧みて、爾曹なにを求るやと問へり。

彼等答へて、ラビ何處に往るやと言ふ。ラビを說けば師といふ義なり。

イエス彼等に來り見よと言ふ。

遂に彼等は往きて、その住りたまふ處る見て、此日ともに住れり。時は晝の四時頃

なりき。

ヨハネの曰ひし言を聞て、イエスに從へる二人の者の其一人は、シモンペテロの兄弟アンデレなり。かれ先その兄弟シモンに遇ひて曰ひけるは、我儕メッシャに遇へり。メッシャを譯ばキリストなり。即ち彼をイエスに携往けり。

イエス視て之に曰ひけるは、爾はヨナの子シモンなり。爾はケパと稱らるべし。ケパを譯けばペテロなり。

明日イエスガリラヤに往かんとして、ピリポにあひ我に從へと曰へり。ピリポはアンデレとペテロの住めるベテサイダと云へる邑の人なり、ピリポナタナエルに遇ひて曰ひけるは、我儕律法の中にモーセが載せたる所、預言者等の記しゝ所の者に遇へり。即ちヨセフの子ナザレのイエスなり。

ナタナエル曰ひけるは、ナザレより何の善き者出でんや。ピリポ彼に曰ひけるは、來りて觀よ。

イエス、ナタナエルの已が許に來るを見、彼を指して曰ひけるは、視よ、眞のイスラエルの人にして其心詭譎なき者ぞ。

ナタナエルイエスに曰ひけるは、如何にして我を知たまふ乎。

イエス之に答て曰ひけるは、ピリポが爾を召ざる先に、無花果樹の下に爾の居るを見たり。

ナタナエル答へて曰ひけるは、ラビ爾は神の子なり、爾はイスラエルの王なり。

イエス答へて曰ひけるは、爾が無花果樹の下に居るを、我見しと言へるに因りて爾信ずるか、此よりも大なる事を爾みるべし。

又いひけるは、我まことに實に爾曹に告ん、天ひらけて神の使等人の子の上に陟降するを見ん。（約翰一〇卅五―五一）

最初の奇蹟

第三日にガリラヤのカナにて婚筵ありしが、イエスの母も此に居れり。イエスと其弟子も婚筵に請かる。

葡萄酒罄ければ、母イエスに曰ひけるは、彼等に葡萄酒なし。イエス彼に曰ひけるは、婦よ爾と我と何の與あらんや。我時は未だ至ず。

その母僕等に向ひて、彼が爾曹に命ずる所の事を行よと曰ひおけり。

ユダヤ人の潔の例に從ひて、四五斗盛の石甕六かしこに備へ有しが、イエス僕等に水を甕に滿せよと曰ひければ、彼等口まで滿せたり。

又これを今挹取て持ゆき、筵を司る者に與せと曰ひければ彼等わたせり。筵を司る者酒に變し水を嘗て、其何處より來しを知ず。然ど水を挹し僕は知れり。筵を司る者新郎を呼びて、彼に曰ひけるは、凡そ人はまづ旨酒を進し、酒酣なるに及びて、魯酒を進すに、爾は旨酒を今まで留めおけり。

此事をイエスがガリラヤのカナにて行るは、休徵の始にして其榮を顯せり、弟子かれを信ず。

此後イエスその母兄弟および弟子等カペナウンに下りしが、其處に居ること久からざりき。（約翰二〇一—十二）

エルサレムにおける耶蘇

父の家を潔む

ユダヤ人の逾越節ちかづきければ、イエスエルサレムに上り。殿にて牛羊鴿を賣者と兌銀する者の座せるを見、繩をもて鞭をつくり、彼等および羊牛を殿より逐出し、兌銀する者の金を散し、其案を倒し、鴿を賣者に曰ひけるは、此者を取て往けわが父の室を貿易の家とする勿れ。

弟子等なんぢの室の爲めに熱心われを蝕はんと錄されたるを憶起せり。

此にユダヤ人こたへて、イエスに曰ひけるは、爾これらの事を爲すからには、我儕に何の休徵を示るや。

イエス答へて、爾曹この殿を毀て、我三日にて之を建てんと言へり。

ユダヤ人いひけるは、此殿を建つるには、四十六年を經しに、爾三日にて之を建つ

るか。

イエスの如此いへるは、其身の殿を指るなり。死より甦り給へる後、弟子たちイエスの此事を語りしを憶起し、聖書と彼の曰ひし言を信せり。（約翰二〇十三―廿二）

ニコデモの來訪

偖てイエス逾越節にエルサレムに在りしに、多の人かれの行し休徴を見て、其名を信ぜり。イエス自己を彼等に托せず。蓋すべての人を知り、また人の心の中を知るが故に、人について證を立る者を求ざれば也。

ユダヤ人の宰にて、パリサイのニコデモと云へる人あり。かれ夜イエスに來りて曰ひけるは、ラビ我儕なんぢは神より來りし師なりと知る。蓋神もし人と偕ならずば爾が行せるこの休徴は、人これを行すこと能はざれば也。

イエス答へて曰ひけるは、誠に實に爾に告げん、人もし新に生れずば神の國を見ること能はじ。ニコデモ彼に曰ひけるは、人はや老ぬれば、如何で復生るゝ事を得んや再び母の腹に入りて生る可けんや。

イエス答へけるは、誠に實に爾に告げん、人は水と靈とに由て生れざれば、神の國に入ること能はざる也。肉に由りて生るゝ者は肉なり。靈に由りて生るゝ者は靈なり。我なんぢに新に生るべき事を言ひしを奇とするなかれ。風は己が任に吹く、なんぢ其聲を聞ども、何處より來り、何處へ往くを知らず。凡て靈に由りて生るゝ者も此の如し。

ニコデモ答へて、如何で此事あらんやと言ふ。

イエス答へて曰ひけるは、爾はイスラエルの師なるに、猶この事を知ざる乎。誠に

實に爾に告げん、我儕知りし事をいひ、見し事を證するに、爾曹は我儕の證を受けず。若しわれ地の事を言ふに爾曹信せずば、況て天の事を言はんには、何で信ずることをせんや。天より降り天にをる人の子の外に、天に升し者なし。モーセ野に蛇を擧げし如く、人の子も擧げらるべし。凡て之を信ずる者に亡ること無くして、永生を受けしめんが爲めなり。

それ神は其生みたまへる獨子を賜ふほどに世の人を愛し給へり。此は凡て彼を信ずる者に亡ぶること無くして永生を受けしめんが爲めなり。神の其子を世に遣はし給へるは、世を審判んとに非ず、彼に由りて世を救はんが爲めなり。彼を信ずる者は審判れず、信せざる者は既に審判れたり。蓋神の生みたまへる獨子の名を信せざるに因る。罪の定まる所以は、光世に臨りしに、人その行の惡に因て光を愛せず、反て暗を愛すれば也。凡て惡をなす者は光を惡み、其行を責られざらんが爲めに光に就らず。眞理を行ふ者は其行の顯はれんが爲めに光に就る。蓋神に遵て行へば也。（約翰三〇廿三—廿五　同三〇一—廿三）

神國建設の準備

耶蘇の施洗說教

此後イエス弟子とユダヤの地に至り、偕に彼處に留りてバプテスマを施す。（約翰三〇廿二）

然れど其實はイエス自らバプテスマを施せるに非ず。弟子これを行るなり。（約翰四〇二）

ヨハネも亦サリムに近き、アイノムに在りてバプテスマを施す。彼處は水おほきが故なり。人々來りてバプテスマを受たり。此時ヨハネは未だ獄に入られざりき。（約翰

三〇廿三—廿四

イエス福音を宣始めし日、齡おほよそ三十なりき。（路加三〇廿三）

ヨハネの謙讓

ヨハネの弟子とユダヤ人と潔事に就て爭辨ありけるが、彼等ヨハネに來りて、曰ひけるは、ラビ視よ、爾と偕にヨルダンの外に在りて、爾が證せし者バプテスマを施すに、皆かれに來れり。

ヨハネ答へて曰ひけるは、人は天より賜ふに非ざれば受くること能はざる也、我はキリストに非ず、惟その先に遣されし者なりと言ひし事を證する者は爾曹なり。新婦をもてる者は新郎なり。新郎の友たちて其聲を聞かば之に緣て喜び多し。我いま此喜び滿つることを得たり。彼は必ず盛んになり我は必ず衰ふべし。

天上より來る者は萬物の上にあり。地より出る者は地に屬き、その言ふところも地の事なり。天より來る者は萬物の上に在り。彼は自ら其見しところ聞きし所の事を證と爲すに其證を受くる者なし。その證を受けし者は印をもて神の眞なる事を證す神の遣し給者は神の言を語る。蓋神これに靈を賜ひて限量なければ也。父は子を愛して萬物を其手に授けたり。子を信ずる者は窮なき生命をえ、子に從はざる者は生命を見ることを得じ、且神の怒その上に留らん。

ヤコブの井

主おのれの弟子を收ること又バプテスマを施せること、ヨハネよりも多しとパリサイの人の聞しを知りし時、ユダヤを去りて、復たガリラヤに往く。サマリアを經ずして行くこと能はず。遂にサマリアのスカルと云へる邑に至れり。此邑はヤコブそ

の子ヨセフに予へし地に近し。此にヤコブの井あり。イエス行途の疲倦にて、其井の傍に座せり。時は晝の十二時ごろなりき。

一人のサマリアの婦、水を汲んとて來りければ、イエスその婦に向ひて我に飲せよと曰ふ。蓋弟子たち食物を買んために、邑へ往きて在らざりし故なり。

サマリアの婦いひけるは、爾はユダヤ人にして、何ぞサマリアの婦なる我に飲むことを求るや、此はユダヤ人とサマリアの人とは交際を爲ざれば也。

イエス答へて曰ひけるは、爾もし神の賜と我に飲せよといふ者の誰なるを知らば、爾われに求めん。然ば活水を爾に予ふべし。

婦イエスに曰ひけるは、主よ、汲器なく井も亦深し。爾何處より汲みて其活水を有るか。この井は我儕の先祖ヤコブの予へし所なり。彼も其子も亦畜までも皆これを

飲みたり。爾は彼よりも勝れし者ならんや。

イエス答へて曰ひけるは、凡て此水を飲む者はまた渴かん。然れど我があたふる水を飲む者は永遠かわく事なし。且わが予ふる水は、其中にて泉となり、湧き出て永生に至るべし。

婦いひけるは、主よ、我が渴くことなく、亦この處に水を汲みに來らぬ爲め、その水を我に予へよ。

イエス曰ひけるは、爾ゆきて夫を呼び來れ。

婦こたへて曰ひけるは、我に夫なし。

イエス曰ひけるは、夫なしと言るは理なり。蓋なんぢ曩に五人の夫ありて、今ある者は爾の夫に非ず。爾の言ひしは眞なり。

婦いひけるは、主よ、我なんぢを預言者と知れり。我儕の列祖は、此山にて拜し、に、爾曹は拜すべき所はエルサレムなりと言ふ。

イエス曰ひけるは、婦よ、我を信ぜよ、唯に此山のみに非ず、亦エルサレムのみにも非して、爾曹父を拜すべき時來らん。爾曹の拜する者を爾曹は知らず、我儕の拜する者を我儕は知る。そは救はユダヤ人より出るが故なり。眞の拜する者靈と眞を以て父を拜する時きたらん。今その時になれり。夫れ父は是の如く拜する者を要め給ふ。神は靈なれば、拜する者もまた靈と眞をもて之を拜すべき也。

婦曰けるは、キリストと稱ふるメッシヤの來らん事を知る。かれ來らん時、凡ての事を我儕に告げん。

イエス曰ひけるは、爾と語る所の我は其れなり。（約翰四〇一—廿六）

サマリア人に傳道

時に弟子きたりて彼の婦と語れるを奇みけれど、其の何を求むるや、又なに故これと語れるか、問へる者も無りき。

婦その水瓶を遺して邑にゆき、人々に曰ひけるは、我すべて行しし事を我に告げし人を來りて觀よ、此はキリストならずや。

是に於て人々邑を出て、イエスの所に來る。その間に弟子かれに請ひて、ラビ食し給へと言へり。

イエス彼等に曰ひけるは、我に爾曹の知ざる食物あり。

弟子たがひに曰ひけるは、食物を彼に饋りし者は誰なるや。

イエス彼等に曰ひけるは、我を遣はし、者の旨に隨ひ、其工を成畢る、是れわが糧

なり。なんぢら穫時になるには、猶四ケ月ありと云はずや。我なんぢらに告げん、目を擧て觀よ、はや田は熟て收穫時になれり。穫者は其工錢を受けて永生に至るべき實を積む。斯て播者と穫者と同に喜ばん。彼は播き、これは穫ると云へるは之に就て眞なり。我なんぢらの勞せざりし所を穫せんとして、爾曹を遣はせり。他の人々勞せしにより、爾曹は其勞したる果を受けたり。

かの婦、わが行しし凡の事を彼われに告げしと、證せし言に因りて、其邑のサマリア人おほくイエスを信ぜり。

是に於てサマリアの人イエスの所に來りて、偕に留り給はん事を求しかば、イエス此に二日留れり、彼の言に因りて信ぜし者前よりも多かりき。かれら婦に曰ひけるは、今なんぢの言ひし事に因りて信ずるに非ず。我儕みづから聞きて、此は誠に世の救主と知たれば也。（約翰四〇廿七—四三）

滿々たる高潮

ガリラヤにおける耶蘇

洗禮者ヨハネ囚はる

『分封の君』（路加九〇七）ヘロデその兄弟ピリポの妻ヘロデヤの事に因りて、人を遣はし、ヨハネを捕へて獄に繫げり。蓋ヘロデが彼の婦を娶りしを、ヨハネ諫めて、爾兄弟の妻を納るは宜しからずと曰へるに因りてなり。ヘロデヤ彼を怨みて殺さんと欲ひしかど能ざりき。ヘロデはヨハネを義かつ善なる人と知りて、彼を敬ひ彼を護

れり。（馬可六〇十七―廿）

彼はヨハネを殺さんと欲へども、民これを預言者とするにより彼等を懼れたり。（馬太十四〇五）

ガリラヤ人耶蘇を迎ふ

イエス、ヨハネの囚はれし事を聞きて（馬太四〇十二）、聖靈の力を以て、ガリラヤに歸りしに（路加四〇十四）、ガリラヤの人々彼を迎へたり。こはさきに節筵の時、イエスのエルサレムにて行ひし凡ての事を、彼等もその節筵に往きて、之を見たれば也（約翰四〇四五）。

其聲名あまねく四方の地に廣がりぬ。斯くて彼等が會堂にて教を爲し（路加四〇十四―五）、神の國の福音を傳へいひけるは、期は滿り、神の國は近けり、爾曹悔改めて福音を信せよ（馬可一〇十四―十五）。

貴人の子病癒ゆ

イエス復たガリラヤのカナに至る。此は曩に水を酒に爲し處なり。時に王の大臣その子病に係りてカペナウンに在りければ、イエスのユダヤよりガリラヤに來れる事をきゝ、卽ちイエスの所に往きてカペナウンに下り、其子を醫し給はんことを請へり、そは瀕死なりければ也。

イエス彼に曰ひけるは、爾曹休徵と異能を見ずば信ぜじ。

彼曰ひけるは、主よ、我子の死ざる先きに下り給へ。イエス曰ひけるは、往け、なんぢの子は生くるなり、其人イエスの曰ひし言を信じて去りぬ。

下る時その僕等かれに遇ひて、告けるは、爾の子は生るなり。彼その愈はじめし時を彼等に問ねければ、答へて昨日の晝の一時に熱さめたりと言ふ。父はイエスの爾

が子は生くる也と言ひたまひし時と其時の同じきことを知りて、己と其全家ことごとく告信せり。

この第二の奇跡は、イエスユダヤよりカリラヤに至りて行るなり。

漁人を召す

彼はゼブルンとナフタリとの界なる、「ガリラヤの（海邊）の邑」（路加四）・カペナウンに至りて此に居れり。これ預言者イザヤの言に、

『ゼブルンの地、ナフタリの地、
海に沿ひたる、ヨルダンの向ふの地、
異邦人のガリラヤ。
これらの暗きにをる民は、
大なる光を見、
死の地と死の蔭に坐する者の上に、
光いでたり。』

と云ひしに應へり。（馬太三〇十三—十六）

衆人神の道を聽かんとて擠擁ける時、イエスゲネサレの湖の濱に立ちて、磯に二艘の船あるを見る。漁の者は船を離れて網を洗ひをれり。其一艘はシモンの船なりしが、イエス之にのり、請ふて岸より少許はなれ、坐して船中より衆人を敎ふ。敎竟りて、シモンに曰ひけるは、澳へいで網を下して漁れ。

シモン答へけるは、師よ、われら終夜はたらきしかど所得なかりき。然れど爾の言に從ひて網を下さん。

既に下ろして魚を圍めると甚だ多く、網さけかゝりければ、いま一艘なる船の侶を招きて來り、助しめしに、彼等が來りし時、其魚二艘の船に物て沈まんばかりなりし。

シモンペテロ之を見て、イエスの足下に俯して、主よ、我を離れたまへ、我は罪人なりと言へり。

是れシモンおよび偕に在し者みな、漁し所の魚の夥しきに驚ける也。シモンの侶なるゼベダイの子ヤコブとヨハネも亦然り。イエスシモンに曰ひけるは、懼るゝ勿れ、なんぢ今より人を獲べし。

彼等船を岸に寄せおき、一切を捨てイエスに從へり。（路加五〇一—十一）

カペナウムの善行の一日

イエス即ち安息日に會堂に入りて敎を爲ししに、人々その敎を駭き合へり。蓋學者の如くならず、權威を有てる者の如く敎たまへば也（馬可一一—廿二）。

會堂に汚れたる鬼の靈に憑れたる人あり。大聲に喊叫いひけるは、噫ナザレのイエスよ、我儕なんぢと何の與はりあらんや、爾きたりて我儕を喪すか、我なんぢは誰なる乎を知る。すなはち神の聖なる者なり。イエス之を責めて曰ひける、聲を出すこと勿れ、其處を出でよ惡鬼つひに其人を衆の中に仆し、傷ずして出づ。衆人みな驚き、互に語りいひけるは、權威と能力を有ちて、汚たる鬼に命せしかば出去れり、是れいかなる道ぞや。

是に於てイエスの名聲、徧ねくガリラヤの四方に播りぬ。（馬可一〇—廿八）

イエス會堂を出て、シモンの家に入りしに、シモンの妻母おもき熱病を患ひ居たり

き。衆人之が爲めにイエスに求ひければ、其傍に立ちて熱を斥しに、熱退けり。婦直に起て、彼等に事へたり。

夕かた日の沒るとき、人々すべての病を患へるもの、鬼に憑れたる者をイエスに携へ來る。その邑こぞりて門に集れり。又多の鬼を逐出し、鬼の言ふ事を許さゞりき（馬可一〇）。惡鬼そのキリストなるを識ればなり（路加四〇）。イエス一々その上に手を按き（路加四〇）。各樣の病を患へる多くの人々を醫せり（馬可一〇）。そは預言者イザヤによりて、自ら我儕の患ひを受け、われらの病を負ふと曰ひたまひしに應へり。（馬太八〇）

癩者癒ゆ

昧爽にイエス早く起き、人なき所にゆき、其處にて祈禱せり。シモンおよび彼と共に在りし者等、その跡を慕ひゆき、彼に遇ひて曰ひけるは、衆人みな爾を尋づぬ。イエス彼等に曰ひけるは、我は敎を宣傳ふる爲めに爾曹と偕に附近の鄕村へ往かん我これが爲めに來れば也。

イエス遍ねくガリラヤの國を經めぐり、其會堂にて敎を宣べ、且鬼を逐出せり。（馬可一〇）

イエスある邑に居りし時（路加五〇）。癩病のもの一人かれに來りて、跪づき求ひ、曰ひけるは、爾もし聖意に適ふときは、我を潔く爲し得べし。（馬可一〇）

イエス憫れみて手をのべ彼に按て、我が意に適へり、潔くなれと言ふやいな、直に癩病はなれ、其人きよまれり。イエス嚴く之を戒しめ、愼みて何をも人に告ぐる勿れ、但ゆきて己が身を祭司に見せ、其潔められし爲めに、モーセが命せし所の物を

獻げて、彼等に證據をなせと言ひて去らしめたり。（馬可一〇四一―四四）

然れども彼いでゝ、先づこの事を大に言ひつたへ、語り廣めければ、イエス此後あらはに城に入がたく（馬可一〇四五）、人なき處に退きて祈りたまひしが、（路加五〇十六）、人々四方より彼に來り（馬可一〇四五）、或は教を聽んとし、或は病を醫されんとせ、（路加五〇十五）しが、彼等を醫すべき主の力彼と偕に在りき（路加五〇十七）。

爭論の始め

癱瘋の者癒ゆ

數日の後、イエス復たカペナウムに來りしに、彼の家に居ること聞えければ、直に多くの人々集ひきたり、門に立つべき塲處さへもなき程なりき。イエス彼等に教を宣ぶ。

此に癱瘋を病みたる者を四人に舁せ、イエスに來れる者ありしが、群集によりて近づき難かりければ、彼の居るところの屋蓋を取除き、癱瘋の人を床のまゝ縋下せり。

イエス其信仰を見て、癱瘋の人に曰ひけるは、子よ爾の罪赦されたり。

數人の學者こゝに坐し居りしが、心中に謂ひけるは、斯人は何故かく惡口を言ふか、神にあらずして誰か罪を赦すことを得ん。

イエス直に彼等が心中に斯くの如き事を論ずるを、自ら其心に知りて彼等に曰ひけるは、爾曹なんぞ心中に斯る事を論ずるや。癱瘋の人に爾の罪は赦されたりと言ふと、起きて爾の床を取りて行けと言ふと孰れが易きや。それ人の子地にて罪を

赦すの權威あることを爾曹に知らせんとて、遂に癱瘓の人に、我なんぢに告ぐ、おきて床を取り、なんぢの家に歸れと曰へり。その人たゞちに起きて床をとり、衆人の前にいづ。衆人みな駭き、神を崇めて曰ひけるは、我儕いまだ斯くの如きことを見しことなし。「今日奇異なる事を見たり。」（路加五〇二六）

稅吏の弟子

イエスまた海邊に往きしに、人々みな彼に來りければ、是等を敎ふ。此より進みてアルパヨの子レビといふ者の稅吏の役所に坐し居けるを見て、我に從へと曰ひければ、彼たちて從へり。（馬可二〇十三—十四）

レビ一切を捨ておき起ちて從へり。

レビ己れの家にてイエスの爲めに、大なる筵を設けしに（路加五〇廿七—廿八）、おほくの稅吏罪ある人々、イエス及び弟子と共に坐せり（馬可二〇十五）。パリサイの人之れを見て、其弟子に曰ひけるは、爾曹の師は何故稅吏や罪ある人と偕に食するか。

イエス聞きて、彼等に曰ひけるは、康强なる者は醫者の助を需めず、唯病ある者これを需む。われ矜恤を欲みて、祭祀を欲まずといふ、此は如何なる意か往きて學ぶべし、夫れわが來るは、義人を招くために非ず、罪ある人を招きて悔改させんが爲めなり。（馬太九〇十一—十三）

新と舊と

ヨハネの弟子及びパリサイの人、つねに斷食する事ありければ、彼等イエスに來りいひけるは（馬可二〇十八）、ヨハネの弟子は屢斷食また祈禱をなす。パリサイの弟子も

亦然り、然るに爾の弟子飲むこと食ふことを爲すは何故ぞ。（路加五〇）

イエス曰ひけるは、新郎の朋友その新郎と共に居る間は之に斷食なさしむる事を得んや。將來新郎と別るゝ日いたらん。其日には斷食すべきなり。

譬を以て曰ひけるは、新衣を裁取りて、舊衣を補ふ者あらじ。若し然せば新衣をも壞ひ、且新より取りたる布は舊ものと合ず。また新酒を舊き革袋に盛る者あらじ。若ししかせば新酒は其袋をはりさき漏れ出づ。かつ革袋も壞るべし。新酒は新しき革袋に盛るべき者ぞ。斯くてこそ兩ながら存なれ。舊酒を飲みて立刻に新酒を飲む者は有じ。是れ舊は尤も好しと云へばなり。（路加五〇三一—三九）

エルサレムにて安息日に癒す

厥後ユダヤ人の節筵ありければ、イエスエルサレムに上れり。

エルサレムの羊門の邊に、ヘブルの方言にてベテスダといふ池あり。此池に五の廊あり。その中に病者、瞽者、跛者また衰へたる者など多く臥ゐて、水の動を待りしそは天の使時々池に下りて、水を動すとあり、水の動けるのち、先ちて池に入りし者は、何の病によらず愈たり。三十八年病みたる者一人かしこに在り。イエス彼が臥しをるを見て、其病の久しきを知り、これに曰ひけるは、愈えんことを欲ふや。病める者こたへけるは、主よ、水の動けるとき、我を扶けて池に入るる人なし。我いらんとする時は、他の人くだりて我より先に入る。

イエス彼に曰ひけるは、起きよ、床を取收て行め。その人立刻に愈え、すなはち床を取收て行めり。此日は安息日なりき。

ユダヤ人いえし者に曰ひけるは、今日は安息日なれば、爾床を取收るは宜からず。

彼等に答へけるは、我を愈しゝ者、われに床を取收て行めと言へり。かれら問ねけるは、爾に牀を取收て行めと言ひし人は誰なるぞや。

愈し者その誰なるを知ざりき。蓋かしこに多の人をりし故、イエス避けたれば也。

其後イエス殿にて、其人に遇ひいひけるは、視よ、爾すでに愈たり。復罪を犯すこと勿れ、恐くは前に勝れる災禍なんぢに羅らん。

其人ゆきて、ユダヤ人に己を愈しゝ者はイエスなりと告ぐ。是に於てユダヤ人イエスを窘迫て殺さんと謀る。蓋はかれが此事を行しは安息日なりければ也。

イエス彼等に答へけるは、我父は今に至るまで働らき給ふ、我もまた働くなり。

此れに因りてユダヤ人いよ〳〵イエスを殺さんと謀る。そは安息日を犯すのみならず、神を己が父といひ、己を神と齊くすればなり。

是故にイエス彼等に答へて曰ひけるは、誠に實に爾曹に告げん、子は父の行ふ事を見て行ふの外は何事をも行なふこと能はず、蓋はすべて父の行なふとこを子も亦行なへば也。父は子を愛し、凡て己の行なふ所の事を彼に示す、爾曹をして奇しましめん爲めにかの事等より、更に大なる事を彼に示めさん。そは父の死し者を甦らせて生しむるが如く、子も己の意に從ひて人を生しむべし。それ父は誰をも鞫かず、審判は凡べて子に委ねたり。是れすべての人をして父を敬ふ如く、子をも敬はしめんが爲め也。子を敬はざる者は之を遣はしゝ父を敬はず。誠に實に爾曹に告げん。我言をきゝ我を遣はしゝ者を信ずる者は、永生を有ちかつ審判に至らず、死より生に遷れり。誠に實に爾曹に告げん。死にし者神の子の聲を聞く時來たらん。今その時になれり、之を聞者は生べし。夫父は自ら生を有てり、其の如く子にも賜ひて

自ら生を有たせたり。また人の子たるに因りて之に審判するの權威を賜へり。之を奇しと爲ること勿れ。そは墓に在る者みな其聲を聞て出るとき來らんとすれば也。善事を行しし者は生を得るに甦り、惡事を行しし者は審判を得るに甦へるべし。われ何事をも自ら行なふと能はず。聞くところに遵ひて審判す。我が審判は公し。そは我わが意を行ふことを求めず、我を遣はし〻父の意を行なふことを求ればなり。もし我事を我がみづから證しせば、我證しは眞ならず。別に我が事を證しする者あり。我その我事を證しする證しの眞なるを知る。なんぢら曩に人をヨハネに遣はし〻に、彼れ眞理の爲めに證しを作り。然れどわれ人の證しを受けず。此事を言ふは爾曹の救れんが爲めなり。ヨハネは燃して光れる燈なり。爾曹このみて暫く其光を喜べり。我はヨハネより大なる證しあり。蓋は父の我に賜ひて成遂げしむる事、すなはち我行なふ所の事は、是れ父の我を遣はし〻ことを證すればなり。且われを遣はし〻父も、我がことを證せり、爾曹いまだ其聲を聞ず、未だ其形を見ず、その道は爾曹の心に存らざりき。蓋なんぢら其遣し〻者を信せざるに因りて知らる〻也。なんぢら聖書に永生ありと意ひて之を究ぶ。この聖書は我について證する者なり。爾曹わが所に生を得んがため來るを欲まず、われ人の榮を受けず。われ爾曹を知る。なんぢらは其心に神を愛するの愛あらざる也。我は吾父の名に靠て來りしに爾曹われを接ず。もし他の人おのが名に靠て來らば爾曹これを接ん。爾曹は互に人の榮を受けて神より出る榮を求めざる者なるに、何で能く信ずることを得んや。爾曹を父に訴ふる者と我を意ふ勿れ。爾曹を訴ふるもの一人あり。即ち爾曹が恃むところのモーセなり。若しモーセを信せば我を信ずべし。蓋モーセ我事を書したれば也。若

し、モーセの書しゝ事を信ぜずば、何で我が言しことを信ぜんや。（約翰五章）

安息日に穗を摘む

當時イエス安息日に麥の畑を過ぎしが、其弟子たち飢て穗を摘食はじめたり。パリサイの人これを見て、イエスに曰ひけるは、爾の弟子は安息日に爲まじき事を行せり。

之に答へけるは、ダビデおよび從に在りし者の饑しとき行し事を未だ讀ざる乎。即ち神の殿に入りて祭司の他は己および從にをる者も食ふまじき供のパンを食へり。また安息日に祭司は殿の內にて安息日を犯せども罪なき事を律法に於て讀ざる乎。われ爾曹に告げん、殿より大なるもの玆に在り。われ矜恤を欲みて祭祀を欲まずとは如何なる事か之を知らば、罪なき者を罪せざるべし。

また彼等に曰ひけるは、安息日は人の爲に設けられたる者にして、人は安息日の爲に設けられたる者に非ず。然れば人の子は安息日にも主たる也。

招かる者多く選ばる者尠なし

弟子の群衆

其聲名あまねくスリヤに播がりしかば、人々すべての患へる者、萬殊の病また痛惱る者、あるひは鬼に憑れたるもの、癲癇、癱瘋の病に罹れる者を彼に携來りければ之を醫せり。

イエスその弟子と共に海邊に退きしに、多の人々ガリラヤより彼に從へり。又ユダヤ、エルサレム、イドマヤ、ヨルダンの外またツロとシドンの邊より、多の人々イ

エスの行ししを聞きて、彼に群り來る。（馬可三〇七—八）

イエスの人々の群集に因りて擁なやまさるゝ事なからん爲に、小舟を我に備へおけと其弟子に曰へり。是れイエス數多の人々を愈しゝに因りて凡て病ひある人々手にて彼に捫らんとて擁逼りしが故なり（馬可三〇九—十）。是れ能力の其身より出でて、彼等を咸とく醫せばなり。（路加六〇十九）

また汚れたる鬼かれを見て、其前に俯伏しさけびて、爾は神の子なりと曰ひしをイエス彼等に我を揚すこと勿れと嚴く戒めたり。（馬可三〇十一—十二）

これ預言者イザヤの曰ひし言に。

『視よ、我が選らびしわが僕、

即ちわが心に適ひたる我が愛しむ者、

われ之に我が靈を賦へん。

かれ異邦人に審判を示すべし。

彼は競ふことなく喊ぶことなし。

人街に於て其の聲を聞くことなし。

審判をして勝とげしむるまでは、

傷める葦を折ることなく、

煙れる麻を熄すことなし。

異邦人も亦その名に賴るべし。』

とあるに應はんせため也。（馬太十二〇十七—廿一）

十二人の選擇

當時イエス祈禱の爲めに山に往きて、終夜神に祈れり、夜明てイエス弟子を呼びその中より十二人を選び（路加六〇十二―十三）。己と偕に置き、また敎を宣傳ふるために遣はし、かつ病を醫し、鬼を逐出すの權威を授く。（馬可三〇十四―十五）

その十二使徒の名は左の如し、首にはペテロと名け給ひしシモン、その兄弟アンデレ、ゼベダイの子ヤコブ其兄弟ヨハネ、ピリポ、バルトロマイ、トマス稅吏マタイ、アルパイの子なるヤコブ、タッタイと名づくるレッバイ、カナンのシモン、イスカリオテのユダ、是れすなはちイエスを賣しゝ者なり。（馬太十〇三―十一）

神國の教訓

神國の民

イエス目をあげて弟子を見て曰ひけるは（路加六〇二廿）、

心の貧しき者は福なり。天國は即ちその人のものなればなり。

哀しむ者は福なり。其人は安慰を得べければなり。

柔和なる者は福なり。其人は地を嗣ぐことを得べければなり。

饑渴くごとく義を慕ふ者は福なり。其人は飽くことを得べければなり。

矜恤ある者は福なり。其人は矜恤を得べければなり。

心の清き者は福なり。其人は神を見ることを得べければなり。

和平を求むる者は福なり。其人は神の子と稱へらるべければなり。

義しきことの爲めに責めらるゝ者は福なり。天國は即ち其人の有なればなり。

我がために人なんぢらを詬しり、また迫めいつはりて各樣の惡言をいはん。其時は

爾曹福なり。喜び樂め、天に於て爾曹の報償おほければ也。そは爾曹より前の預言者をも如此せめたりき。

爾曹は地の鹽なり。鹽もし其味を失なはゞ何を以か故の味に復さん。後は用なし。外に棄られて人に踐るゝのみ。

爾曹は世の光なり。山の上に建られたる城は隱ることを得ず。燈を燃して斗の下におく者なし。燭臺に置きて家に在るすべての物を照さん。此の如く人々の前に爾曹の光を耀かせ。然れば人々なんぢらの善行を見て、天に在す爾曹の父を榮むべし。（馬太五〇三―十六）

神國の義

われ律法と預言者を廢つる爲めに來れりと意ふ勿れ。われ來りて之を廢るに非ず。成就せん爲めなり。われ誠に爾曹に告げん、天地の盡きざる中に律法の一點一畫も遂げつくさずして廢ることなし。是故に人もし誠の至微き一を壞り、又その如く人に敎へなば、天國に於て至微き者と謂れん。凡そ之を行ひ、且人に敎ふる者は天國に於て大なる者と謂るべし。我なんぢらに告げん、學者とパリサイの人の義しきより、爾曹の義しきこと勝れずば、必ず天國に入ること能はじ。

古の人に告げて殺こと勿れ、殺す者は審判に干らんと言へることあるは爾曹が聞し所なり。然れど我なんぢらに告げん、凡て故なくして其兄弟を怒る者は審判に干らん。又その兄弟を愚考よといふ者は集議に干らん。又狂妄よといふ者は地獄の火に干るべし。

是の故に爾もし禮物を携へて、壇に往たる時、かしこにて兄弟に恨るゝことあるを

憶起さば、その禮物を壇の前に留き、まづ往きて、爾の兄弟と和ぎ、後きたりて爾の禮物を献よ。爾を訟ふる者と偕に途間にある時、はやく和げよ。恐くは訟ふる者なんぢを審官に付し、審官また爾を下吏に付し、遂に爾は獄に入られん。我まことに爾に告げん、分釐までも償はざれば、必ず其所を出ること能ざる也。

古の人に告げて、姦淫すること勿れと言へることあるは、爾曹が聞し所なり。然れど我なんぢらに告げん、凡そ婦を見て色情を起す者は、中心すでに姦淫したる也。もし右の眼なんぢを罪に陷さば、抉出して之を棄よ。蓋は五體の一を失ふは、全身を地獄に投入れらるゝよりは勝れり。もし右の手なんぢを罪に陷さば、之を斷て棄よ。蓋は五禮の一を失ふは、全身を地獄に投入れらるゝよりは勝れり。

また曰へることあり、凡そ人その妻を出さんとせば、之に離縁狀を與ふべしと。然れど我爾曹に告げん、姦淫の故ならで、其妻を出す者は、之に姦淫なさしむる也。又出されたる婦を娶る者も姦淫を行ふなり。

また古の人に告て僞の誓を立る事勿れ、なんぢ誓ふ所は、必ず主に遂ぐべしと言へる事有るは、爾曹が聞きし所なり。然れど我爾曹に告げん、更に誓ふこと勿れ、天を指して誓ふ勿れ、是れ神の座位なれば也。地を指して誓ふこと勿れ、これ神の足凳なれば也。エルサレムを指して誓ふこと勿れ、これ大王の京城なれば也。爾の頭を指して誓ふ勿れ、そは一すぢの髪だに白し黑すること能ざれば也。爾曹たゞ是々否々といへ、此れより過ぐるは惡より出るなり。

目にて目を償ひ、齒にて齒を償へと言へること有るは、爾曹が聞きし所なり。然れど我なんぢらに告げん、惡に敵することなかれ。人なんぢの右の頰を批ば、亦ほかの

頰をも轉して之に向けよ。爾を訴へて裏衣を取らんとする者には、外服をも亦とらせよ。人なんぢに一里の公役を強ひなば、之と偕に二里ゆけ。爾に求むる者には予へ、借らんとする者を卻くる勿れ。

爾の隣を愛しみて、其敵を憾むべしと言へること有るは爾曹が聞きし所なり。然れども我なんぢらに告げん、爾曹の敵を愛くしみ、爾曹を詛ふ者を祝し、爾曹を憎む者を善視し、虐遇迫害ものゝ爲めに祈禱せよ。如此するは天に在す爾曹の父の子とならん爲めなり。夫れ天の父は其日を善者にも惡者にも照し、雨を義しき者にも義しからざる者にも降せ給へり。爾曹をのれを愛する者を愛するは、何の報賞かあらん。稅吏も然せざらん乎。安否を兄弟にのみ問ふは人より何の過たる事かあらん。稅吏も然せざらん乎。是故に天に在す爾曹の父の完きが如く、爾曹も完くすべし。

僞善の非

なんぢら人に見せん爲めに其義しきを人の前に行すことを愼め、もし然らすば天に在す爾曹の父より報償を得じ。

是故に施濟を行すとき、人の榮を得ん爲めに會堂や街衢にて、僞善者の如く筑を己が前に吹しむる勿れ。我まことに爾曹に告げん、彼等は既にその報償を得たり。なんぢ施濟をする時、右の手の爲すことを左の手に知らする勿れ。如此するは其施濟の隱れんが爲めなり、然らば隱れたるに鑒たまふ爾の父は明顯に報いたまふべし。

なんぢ祈る時に、僞善者の如くする勿れ。彼等は人に見られんが爲めに、會堂や街衢の隅に立ちて祈ることを好む。われ誠に爾曹に告げん、彼等は既にその報償を得たり。なんぢ祈る時は、嚴密なる室にいり、戸を閉ぢて隱れたるに在す爾の父に祈

れ。然らば隱れたるに鑒たまふ、爾の父は明顯に報いたまふべし。爾曹祈る時は、異邦人の如く重複語を言ふなかれ、彼等は言おほきを以て聽れんと意へり。是故に彼等に效ふこと勿れ。爾曹の父は求ざる先に、其需用物を知りたまへば也。然れば爾曹かく祈るべし。

天にます我儕の父よ、
爾名を崇めさせたまへ、
爾國を來らせたまへ、
爾意の天に成る如く、地にも成させ給へ、
我儕の日用の糧を今日も與へたまへ、
我儕に負債ある者を我儕がゆるす如く、
我儕の負債をも免したまへ、
我儕を試練に遇はせず、惡より救ひ出したまへ。

爾曹もし人の罪を免るさば、天に在ます爾曹の父も亦なんぢらを免し給はん。然れども人の罪を免さずば、爾曹の父も爾曹の罪を免し給はざるべし。

なんぢら斷食するときは、僞善者の如く憂容をする勿れ。彼等は斷食を人に見せん爲めに、顏色を損ふ。我まことに爾曹に告げん、彼等は既に其報償を得たり。なんぢ斷食する時は、首に膏をぬり、面を洗へ。如此するは爾の斷食人に見えずして、隱微たるに在す爾の父に現はれんが爲めなり。然れば隱微たるに見たまふ、爾の父は明に報いたまふべし（馬太六〇—一八）

只神に賴れ

蠹くひ、銹くさり、盜うがちて竊む所の地に財を蓄ふること勿れ。蠹くひ、銹くさり、盜穿ちて竊ざる所の天に財を蓄ふべし。蓋なんぢらの財の在るところに心も亦ある可ければ也。

身の光は目なり。若しなんぢの目瞭かならば、全身も亦明なるべし。若しなんぢの目眊らば、全身暗かるべし。是故に爾の中の光、もし暗からば、其暗きこと如何に大ならずや。

人は二人の主に事ふること能はず、蓋これを惡み、かれを愛み、此れを親しみ、彼を疎むべければ也。なんぢら神と財に兼ね事ふること能はず。

是故に我なんぢらに告げん。生命の爲めに何を食ひ、何を飲み、また身體の爲めに何を衣んと憂慮ふこと勿れ。生命は糧より優り、身體は衣よりも優れる者ならずや。

なんぢら天空の鳥を見よ、稼ぐことなく穡ることを爲ず、倉に蓄ふることなし。然るに爾曹の天の父は之を養ひ給へり。爾曹之よりも大に勝る〻者ならずや。爾曹のうち誰か能くおもひ煩ひて、其生命を寸陰も延べ得んや。

また何故に衣のことを思ひわづらふや。野の百合花は如何して長つかを思へ。勞めず紡がざる也。われ爾曹に告げん、ソロモンの榮華の極みの時だにも、其裝この花の一に及ざりき。神は今日野に在りて、明日爐に投入れらる〻草をも、如此よそは せ給へば、況して爾曹をや。嗚呼信仰うすき者よ、然れば何を食ひ、何を飲み、何を衣んとて思ひわづらふ勿れ。此れみな異邦人の求むる者なり。爾曹の天の父は凡て此等のもの〻必需ぬことを然りたまへり。爾曹まづ神の國と其義とを求めよ、然らば此等のものは皆なんぢらに加へらるべし。

此故に明日の事を憂慮ふなかれ。明日は明日の事を思ひわづらへ、一日の苦勞は一日にて足れり。（馬太六〇十九―廿四）

愛の判斷

是故に爾曹の父の憐憫の如く、亦憐憫を爲すべし。人を議すること勿れ。然らば爾曹も議せられず。人を罪すること勿れ、然らば爾曹も罪せられず　人を恕せ、然らば、爾曹も恕さるべし。人に與へよ、然らば爾曹も予らるべし。彼等量を嘉して搖いれ、撼いれ、溢るゝ迄にして爾曹の懷に納れん、爾曹量る所の其量にて亦人に量らるべし。

また譬を彼等に曰ひけるは、譬は譬の相者をなし得るや。相共に溝壑に陷らざらん乎。弟子は其師に踰ず、凡そ全備なる者は其師の如なるべし。なんぢ兄弟の目にある物屑を見て、己の目にある梁木を知らざるは何ぞや。如何で己の目にある梁木を見ずして、兄弟に對ひ、兄弟よ、爾の目にある物屑を我に取せよと云ふことを得んや。僞善者よ、先おのれの目より梁木をとれ、然らば兄弟の目にある物屑を取ることを明かに見ゆべし。（路加六〇三六―四二）

犬に聖物を與ふる勿れ、また豚の前に爾曹の眞珠を投げ與ふる勿れ、恐くは足にて之を踐み、ふりかへりて爾曹を噬みやぶらん。（馬太七〇六）

祈禱

また彼等に曰ひけるは、爾曹の中もし或人夜半に其友へ往きて、友よ我が朋輩旅より來りしに供ふべき物なきゆゑ三のパンを借よと曰はんに、內に居るもの答へて、我を煩はす勿れ、既や門は閉ぢ、われと共に、兒曹も牀に在れば起きて予ふること

能ずといふ者あらん乎。我なんぢらに告げん、其友なるにより起きて予へざれ雖、ひたすら請ふが故に、其需めに從ひ、起きて予ふべし。

我なんぢらに告げん、求めよ、然らば予られ、尋ねよ、然らばあひ、門を叩けよ、然らば啓るることを得ん。蓋はすべて求むる者は得、たづぬる者はあひ、門を叩く者は啓かるれば也。爾曹のうち父たる者、誰か其子のパンを求めんに、石を予へんや、魚を求めんに、其に代て蛇を予へんや。卵を求めんに蠍を予へんや。然れば爾曹惡者ながら善賜をその兒曹に予ふるを知る。まして天に在す爾曹の父は求る者に聖靈を予へざらんや。（路加十一〇—十三）

至誠

窄き門より入れよ。沉淪に至る路は濶く、その門は大いなり。此れより入るもの多し。命に至る路は窄く、その門は小さし、其路を得るもの少なり。

偽の預言者を謹めよ。彼等は綿羊の姿にて爾曹に來れども、内は殘狠なり。是れその果によりて知るべし。誰か荆棘より葡萄をとり、蒺藜より無花果を採ることをせん。凡て善樹は善果を結び、惡樹は惡果を結べり。善樹は惡果を結ばず、惡樹は善果を結ぶこと能ざる也。凡そ善果を結ざる樹は斫れて火に投入れらる。是故に其果に由て之を知べし。（馬太七〇—十三—廿）

善人は心の善庫より善を出し、惡人はその惡庫より惡を出す、蓋は心に充るより口に言る丶也。（路加六〇—四五）

我を召びて、主よ主よと曰ふもの盡く天國に入るに非ず。唯これに入る者は我天に在す父の旨に遵ふ者のみなり。其日われに語りて、主よ主よ主の名に託てをしへ、

主の名に託て鬼をおひ、主の名に託て多く異能を行しに非ずやと云ふもの多からん。其時かれらに告げ、われ嘗て爾曹を知ず、惡をなす者よ、我を離去れと曰はん。是故に凡て我がこの言を聽きて行ふ者を、磐の上に家を建てたる智者に譬ん。雨ふり、大水いで、風ふきて、其家を撞てども倒るることなし。是れ磐を基礎と爲したれば也。凡て我この言を聽きて行はざる者を、沙の上に家を建たる愚なる人に譬ん。雨ふり、大水いで、風ふきて、其家を撞ば、終には倒れてその傾覆おほいなり

イエス此等の言を語り竟てたまへるとき、集りたる人々其敎を駭きあへり。そは學者の如ならず、權威を有る者の如く敎たまへば也。（馬太七〇廿一―廿九）

ガリラヤ旅行

百人の長の篤信

イエス此のすべての言を民に敎へ畢てカペナウンに入れり。

ある百夫の長その愛する僕やみて死ぬばかりなりければ、イエスの事を聞き、ユダヤの長老等を遣して來り、僕を助け給はんことを求へり。彼等イエスに就たり、切に勸め、いひけるは、此事を求むる人は善人なり。我民を愛し、我儕の爲めに會堂を建たり。

イエス彼等と共に往きて既や其家に近づけるとき、百夫の長朋友を遣して曰せけるは、主よ、自己を勞はすこと勿れ、我が家裏に入れ奉るは畏れ多し。故に我なんぢの前に出るも亦畏れあり。第一言を發したまはば我僕は愈ん。蓋はわれ人の權威の下に屬る者なるに、我下に亦兵卒ありて、此に往けと命ば往きかれに來れと命ば來

る。我僕に之を行と命ば即ち行すが故なり。（路加七〇一―八）

イエス聞きて之を奇しみ、從へる人々を顧りみて、曰ひけるは、我まことに爾曹に告げん、イスラエルの中にだに未だ斯る篤信に遇はざるなり。（路加七〇九）

われ爾曹に告げん、多の人々東より西より來りて、アブラハム、イサク、ヤコブと偕に天國に坐し、國の諸子は外の幽暗に逐ひ出され、其處にて哀哭切齒すること有らん。（馬太八〇十一―十二）

遣はされたる者、家に歸りて病みたりし僕を見れば、已に全快せり。（路加七〇十）

寡婦の子を蘇らす

翌日イエスナインと云へる邑に往きけるに、許多の弟子および許多の人々も共に往けり。邑の門に近づきしとき、舁出さるゝ死人あり、其母は嫠にて、此は獨の子なり、邑の人々多くこれに伴ふ。

主嫠を見て憫れみ哭なかれと曰ひて、近より其襯に手を按けければ、舁る者ども止れり。

イエス曰ひけるは少者よ、我なんぢに命ふ、おきよ。

死にたる者起きて且言ひ始む。イエス之れを其母に予せり。

衆人みな懼れて神を崇め、いひけるは、大なる預言者われらの中に興る。神その民を眷顧たまへり。

イエスの此聲名、ユダヤの全國また徧く四方に揚りぬ。（路加七〇十一―十七）

洗禮者ヨハネの疑問

ヨハネの弟子すべて是等の事を「獄舍にて」（馬太十一〇二）彼に告げければ、ヨハネ二人の

弟子を召びて、言遣しけるは、來るべき者は爾なるか、亦われら他に俟つべき乎。

その二人イエスに來たり、曰ひけるは、バプテスマのヨハネ我儕を爾に遣はして言はしむ。來るべき者は爾なるか、亦われら他に俟つべきか。

此時イエス多くの疾あるひは病、および惡鬼に憑れたる者を醫し、且おほくの瞽に見ゆることを賜たり。イエス彼等に答へ曰ひけるは、爾曹が見るところ聞くところをヨハネに往きて告げよ。夫瞽者は見、跛者は行み、癩者は潔り、聾者はきゝ、死し者は復活され、貧者は福音を聞せらる。凡そ我が爲めに躓かざる者は福なり。

（路加七〇十八―廿三）

耶蘇の洗禮者ヨハネ觀

ヨハネの使者さりし後、イエスヨハネの事を衆人に曰ひけるは、何を見んとて野に出しや、風に動さるゝ葦なる乎。然らば爾曹なにを見んとて出しや、美服を衣たる人なるか、文繡を衣て奢る者は王の宮に在り。然らば何を見んとて出しや預言者なるか、然りわれ、爾曹に告げん、是れ預言者よりも卓越たる者なり。それ爾に先ちて、道を備ふる我使者を、爾の前に遣らんと、錄されたるは即ち此れなり我なんぢらに告げん、婦の生める者のうち、未だバプテスマのヨハネより大なる預言者は無し。されど神の國の至微者も彼よりは大なる也。ヨハネに聞ける庶民また稅吏は、其のバプテスマを受けて神を義しとせり。パリサイの人また敎法師は其のバプテスマを受けず、自ら暴ひて神の旨に背きたり。

バプテスマのヨハネの時より今に至るまで、人々勵みて天國を取んとす。勵みたる者は之を取れり。それ凡ての預言者と律法の預言したるはヨハネの時までなれば也

若しなんぢら我言を承ることを好まば來るべきエリヤは是れなり。耳ありて聽ゆる者は聽くべし。

我この世を何に譬んや。童子街に坐し其侶を呼びて、われら笛ふけども爾曹をどらず、哀みをすれども、爾曹胸うたずと云ふに似たり。蓋はヨハネ來りて食ふこと飲むことを爲ざれば、鬼に憑れたる者なりと人々言へり。人の子きたりて食ふ事をし飲むことを爲れば、又食を嗜み、酒を好む人、稅吏罪ある者の友也といふ。然れども智慧は智慧の子に義しと爲らるゝ也。（馬太十一〇十二—十九）

洗禮者ヨハネの死

斯くてヘロデその誕生の日、もろ〳〵の大臣千人の長およびガリラヤの尊き人々に享宴をなす日いたりければ、ヘロデヤの女きたりて舞をなし、ヘロデと其席に列れる人々を樂ましむ。王その女に曰ひけるは、何にても我に求へ、爾が望むところの者は、我なんぢに與ふべし。又彼に凡そ、爾が求むるものは、我が領分の半に至るとも、爾に與へんと誓ふ。

女いで〻其母に何を求むべき乎と曰ひければ、母乃ちバプテスマのヨハネが首と曰へり。

女たゞちに急ぎ王にきたり、バプテスマのヨハネが首を盆に載て、即時に我に賜へと求めたり。

王甚だ憂へけれども、既に誓ひたると、同席の者の故とをもて之を拒むことを欲ずして直にヨハネの首を携來れと命じて、兵卒を遣はしければ、彼ゆきて獄に於て之を斬り、其首を盆にのせ、携來りて女に與ふ、女は之を其母に與たり。（馬可六〇廿一—廿八）

ヨハネの弟子等、この事を聞きて來り、其屍を取りて墓に葬り。（馬可六〇廿九）往きてイエスに告ぐ。（馬太十四〇十二）

悔改めたる婦

或るパリサイの人イエスを請きて共に食せん事を願ひければ、イエスパリサイの人の家に入りて食に就り。邑の中に惡行を爲せる婦ありけるが、イエスがパリサイの人の家に坐せるを知りて、蠟石の盒に香膏を携來り、イエスの後にたち、足下に哭き、涙にて其足を濡し、首の髪をもて、之を拭ひ、かつ其足に口を接け、また香膏を之に抹れり。

イエスを請きたるパリサイの人、これを見て心の中に謂ひけるは、此人もし預言者ならば、捫し者は誰なる乎、又如何なる婦なる乎を知らん。此婦は惡行ことを爲せる者なり。イエス之に答へて曰ひけるは、シモンよ、我なんぢに言ふ事あり。答へけるは、師よ、言ひたまへ。

イエス曰けるは、或債主に二人の負債人ありて、一人は金五百、一人は五十を負りしに、償方なかりければ、債主此二人を免したり。然れば二人の者その債主を愛すること、孰か多き、我に聞せよ。シモン答へけるは、我おもふに免るゝ事の多き者ならん。

イエス曰ひけるは爾が意ふところ違ざる也。遂に婦を顧りみて、シモンに曰ひけるは、此婦を見るか、我なんぢの家に入るに、爾は我足に水を給へず、此婦は涙にて我足を濡し、首の髪をもて拭へり。爾は我に口を接ず、此婦は我こゝに入りし時より、我足に口を接けて已ず。爾は我首に膏を抹ず、此婦は我足に香膏を抹れり。

是故に我なんぢに言はん。此婦の多の罪は赦されたり。之に因りて其愛も亦多きなり。赦さるゝこと少なき者は其愛も亦少なし。

是に於て其婦に曰ひけるは、爾の罪赦さる。同に坐せる者ども、心の中に謂ひけるは、此人はこれ誰なれば罪をも赦す乎。

イエス婦に曰ひけるは、爾の信爾を救へり、安然にして往け。（路加七〇卅六―五十）

隨伴の婦人達

此後イエス鄕邑を周遊て、神の國の福音を宣傳ふ。十二の弟子も偕に從ひぬ。また前に惡鬼を患たりし者病を痊れたる婦等も從ひたり、即ち七の惡鬼を逐出れたるマグダラといふマリア、又ヘロデの家令クーザの妻ヨハンナ、又スザンナ、此ほか多の婦ありて、皆その所有を以て、イエスに事たりき。（路加八〇一―三）

高木の風

耶蘇の同胞兄弟

イエス家に入りしに、多くの者また來り集りければ、食する暇もなかりき。其親屬きゝて、彼は狂氣せりと言へり。（馬可三〇廿―廿一）

此時イエスの母と兄弟きたりけれど、群集に因りて近くこと能ざりしかば、或人これをイエスに告げて曰ひけるは、爾が母と兄弟なんぢに遇はんとて外に立てり。（路加八〇十九―廿）

イエス答へて曰ひけるは、我が母わが兄弟は誰ぞや。（馬可三〇三三）

手を伸べ、その弟子を指して曰ひけるは、是れわが母、わが兄弟なり。蓋はすべて

我が天に在す父の旨を行なふ者は、是れわが兄弟、わが姉妹、わが母なれば也。（馬太十二〇四九―五十）

永遠の罪の誡

爰に鬼に憑れたる瞽の瘖なる者を、イエスの所に携來りければ、此瞽の瘖を醫して言ひ見るやうに爲せり。衆人みな奇みて曰ひけるは、此はダビデの裔には非ざる乎。

パリサイの人きゝて、曰ひけるは、此人は鬼の王ベルゼブルを役ふに非ざれば、鬼を逐出すことなし。

イエスその意を知りて、彼等に曰ひけるは、凡て相爭ふ國は亡び、凡て相爭ふ邑や家は立つべからず。サタン若しサタンを逐出さば、自ら相爭ふなり、然らば其國いかで立たんや。若しわれベルゼブルに由りて惡鬼を逐出さば、爾曹の子弟は誰に由りて之を逐出すや、夫れかれらは爾曹の裁判人となるべし。若しわれ神の靈に由りて鬼を逐出し、ならば、神の國はもはや爾曹に至れり。（馬太十二〇廿二―廿八）

勇者鎧を擐て邸を守るときは、其所有安全なり。もし之より勇者きたりて、是れに勝つときは、其恃みとせる鎧を奪ひ、且贓物を分つべし。我と偕ならざる者は我に叛き、我と偕に斂ざる者は散すなり。（路加十一〇二十―二三）

われ誠に爾曹に告げん。人の凡の罪と瀆す所の褻瀆は赦るべけれど、聖靈を瀆す者は限なく赦さる可からず。限なき刑罰に干らん。斯くいへるは、人々イエスを惡鬼に憑れたりと言ひしが故なり。（馬可三〇廿八―卅）

或は樹をも善とし、其果をも善とせよ。或は樹をも惡とし、其果をも惡とせよ。夫れ樹は其果に由りて知るゝなり。あゝ蝮の裔よ、爾曹惡にして何で善を言ふことを

得んや。夫れ心に充るより口に言るゝ者なれば也。善人は心の善庫より善ものを出し、惡人はその惡庫より惡きものを出せり。われ爾曹に告げん、凡て人のいふ所の虛言は審判の日に之を訴へざるを得じ。それ爾その曰ふところの言に由りて義とせられ、又其いふ言に由りて罪ありとせらるゝ也。（馬太十二〇三三—卅七）

三　休徵の要求

此時ある學者とパリサイの人答へて曰ひけるは、師よ、休徵をなして我儕に見せんことを爾に請ふ。

答へて彼等に曰ひけるは、奸惡なる世は休徵を求む。されど預言者ヨナの休徵の外は之に休徵を與へられじ。（馬太十二〇三八—卅九）

蓋はヨナが三晝夜の人に奇跡と爲りし如く、人の子は今の世に奇跡と爲るべし。南方の女王審判の日に共に起ちて、今の世の人の罪を斷めん。彼は地の極よりソロモンの智慧を聽んとて來れり。夫れソロモンより大なる者こゝに在り。二子べの人審判の日に共に起て、今の世の罪を斷めん。彼等はヨナの勸言に因りて悔改めたり。夫れヨナより大なる者こゝに在り。（路加十一〇三十—卅二）

惡鬼人より出て、旱たる地を巡り、安息を求むれども得ずして、曰ひけるは、我が出し家に歸らん。既に來りしに、空虛にして掃淨り、飾れるを見、遂に往きて、己よりも惡き七の惡鬼を携へ、偕に入りて此に居へば、その人の後の有狀は前よりも更に惡しかるべし、此のあしき世もまた此くの如くならん。（馬太十二〇四三—四五）

この事を言へるとき、群集の中より、一婦聲を揚げて曰ひけるは、爾を孕みし腹と爾の吮し乳は福なり。イエス答へけるは、然り、されど神の道を聽きて、其れを守

る者の福には若ず。（路加十一〇、廿七—廿八）

神國の譬

種まく者

當日イエス家を出て、海邊に坐せしに、多の人々彼に集まり來りければ、イエスは舟に登りて坐し、凡の人々は岸に立てり。

イエス譬を以て、多端の言を人々に語りぬ。種まく者播きに出しが、播けるとき、路の旁に遺し種あり。空中の鳥きたりて、啄み盡せり。また土うすき、磽地に遺し種あり。直に萌出でたれど、日の出しとき、灼れしかば、根なきが故に槁たり。また棘の中に遺ちし種あり。棘そだちて之を蔽げり。また沃壤に遺ちし種あり。實を結べること、或は百倍、あるひは六十倍、あるひは三十倍せり。耳ありて聽ゆる者は聽べし。

衆人の居らざりし時、イエスの側に在りし者、十二の弟子と偕に（馬可四〇）來りて、彼に言ひけるは、何故に譬をもて彼等に語り給ふや。（馬太十三〇十）

答へて曰ひけるは、爾曹には天國の奥義を知ることを與へたまへど、彼等には與へ給はざれば也。それ持てる者は與へられてなほ余りあり。持たぬ者はその持てる者をも奪らるゝ也。彼等は視ても見ず、聽きても聞かず、悟らざるが故に、われ譬へをもて彼等に語れり。イザヤの預言に、

『爾曹は聽けども悟らず、
視れども見ず、

そはこの民は目にて見、
耳にて聽き、
心にて悟り、
改めて我に醫されんことを恐れ、
その心を頑くし、
耳を蔽ひ、
目を閉ぢたり』
と云ひしに應へり。
然れど爾曹の目は見、爾曹の耳は聞くが故に福なり。われ誠に爾曹に告げん。多の預言者と義人は爾曹が見るところを見んとしたりしが見ることを得ず、爾曹が聞くところを聞かんとしたりしが、聞くことを得ざりき。
また彼等に曰ひけるは、爾曹この譬を知らざるか、然らば如何にして凡ての譬を識ることを得んや。それ播者は敎を播くなり。（馬可四〇十三—十四）
種は神の道なり。（路加八〇十一）天國の敎を聞きて悟らざれば、惡鬼きたりて其心に播れたる種を奪ふ。是れ路の旁に播きたる種なり。僥地に播れたる種は、是れ敎を聽きて速かに喜び受くれども、己に根なければ、暫時のみ、敎の爲めに患難あるひは迫らるゝ事の起る時は、忽ち道に躓く者なり。また棘の中に播れたる種は、是れ敎を聽けども、此世の思慮と貨財の惑に敎を蔽れて、實らざる者なり。沃壤に播れたる種は、是れ敎を聽きて、悟り實を結ぶこと、或は百倍、あるひは六十倍、あるひは三十倍たるべし。（馬太十三〇十九—廿三）

毒麥

また譬を彼等に示して曰ひけるは、天國は人、畑に善き種を播くに似たり。人々の寢たる間に、其の敵きたり、麥の中に稗子を播きて去れり。苗はえ出て、實りたるとき、稗子も現はれたり。主人の僕きたりて、曰ひけるは、主よ、畑には美種を播ざりしか、如何して稗子ある乎。僕に曰ひけるは、敵人これを爲せり。僕主人に曰ひけるは、然らば我儕ゆきて之を拔きあつむるは宜きか。否おそらくは、爾曹稗子を拔きあつめんとて、麥をも共に拔くべし。收獲まで二ながら長ておけ、我かりいれの時、まづ稗子を拔集めて焚かん、爲めに之を束ね、麥をば我倉に收めよと刈者に言はん。（馬太十三〇廿四―廿）

長てる種

また曰ひけるは、神の國は人、種を地に播くが如し。日夜起臥する間に、種はえいで、成長ども其然る故を知ず。それ地は自から實を結ぶものにして、初めには苗つぎに穗いで、穗の中に熟したる穀を結ぶ。既に熟れば、穫時いたるに因りて、直に鎌を入れさする也。（馬可四〇廿六―廿九）

芥種

また曰ひけるは、神の國は何に比へ、何の譬を以て之を喩ん。一粒の芥種のごとし之を地に播くときは、百樣の種より微けれど、既に播て、萌出づれば、百樣の野菜よりは大きく、かつ巨なる枝を出して、空の鳥その蔭に棲むほどに至るなり。（馬可四〇廿―廿二）

また譬を彼等に語りけるは、天國は麪種の如し、婦これをとり、三斗の粉の中に藏せば悉く脹發すなり。（馬太十三〇卅三）

譬の解

イエス譬をもて、凡べて此等の事を衆人に語りたまへり。譬にあらざれば語り給はず。これ預言者によりて、

『われ譬を設けて口を啓き、
世の始めより隱れたる事を言ひ出さん』

と云はれたるに應はせんためなり。

遂にイエス衆人を歸へして家に入れり。其弟子きたりて曰ひけるは、畑の稗子の譬を我儕に解きたまへ。之に答へて曰ひけるは、美種を播く者は人の子なり。畑はこの世界なり。美種は是れ天國の諸子なり。稗子は惡魔の子類なり。之をまく敵は惡魔なり。收穫は世の末なり。刈者は天の使等なり。稗子の斂めて火に焚る如く、此世の末に於ても此の如くなるべし。人の子その使者たちを遣はして、其國の中より凡て躓礙となる者、また惡をなす人を斂めて、之を爐の火に投入るべし。其處にて哀哭切齒すること有らん。此のとき義人は其の父の國に於て、日の如く輝かん。耳ありて聽ゆる者は聽べし。（馬太十三〇卅四—四三）

隱れし寶

また天國は畑に藏れたる寶の如し。人みいださば、之を秘し、喜び歸り、其所有を盡く賣りて、その畑を買ふなり。（馬太十三〇四四）

眞珠

また天國は好き眞珠を求めんとする商人の如し。一の値たかき眞珠を見出さば、その所有を盡く賣りて之を買ふなり。（馬太十三〇）（四五—四六）

魚の網

また天國は海に投ちて、各樣の魚をとる網の如し。既に盈れば岸に曳きあげ、坐りてその嘉きものを器にいれ、惡しきものを棄つるなり。世の末に於ても此の如くならん。天の使等いでゝ義者の中より惡者を取りわけ、之を爐の火に投入べし。其處にて哀哭切齒すること有らん。

イエス彼等に曰ひけるは、此事を皆悟りしや。彼に曰ひけるは、主よ然り。

イエス彼等に曰ひけるは、然らば天國について敎へられたる學者は、新き物と舊き物とを其庫より出す、家の主人の如し。（馬太十三〇）（四七—五二）

湖畔奇蹟の一日

耶蘇暴風を靜む

偖その日の夕暮イエス彼等に向の岸に濟れと曰ければ、弟子たち衆人を歸らせイエスの舟に在しを其まゝ之と偖に濟れり。又他の小舟も偖に往り。時に颶風おこり浪うちこみて殆ど舟に滿、イエス艄のかたに枕して寢たりしが、弟子かれの目を醒して曰けるは、師よ我儕が溺るゝをも顧み給はざる乎。

イエス起きて風を斥しめ、且海に靜りて穩かに爲れと曰ひければ、風やみて大に和たり。

斯くて彼等に曰ひけるは、何故かく懼るゝや。爾曹何ぞ信なきや。

彼等甚しく懼れ、互に曰ひけるは、風と海さへも順ふ、是れ誰なるぞ。（馬可四〇—四一）

惡鬼

斯くてガリラヤに對へるガダラ人の地に着きて、岸に登し時、ある一人邑より出て、イエスに遇ふ。この者は久しく惡鬼に憑れ、衣をきず、家に住まず、惟塚にのみ居たりき。

イエスを見て喊び、その前に俯伏し、大聲に呼りけるは、至上神の子イエスよ、我なんぢと何の與あらんや。爾に求む、我を苦しむると勿れ。此の惡鬼に人より出よと、イエスが命じたるに因りてなり。彼の憑れたる事すでに久し。鏈また桎梏にて繫守れども、其れを打碎き、惡鬼の爲めに、野に逐れぬ。

イエス之に問ふて曰ひけるは、爾が名は何と稱ふや。答へけるは、レギヨン是れおほくの惡鬼の入りたるが故なり。（路加八〇廿六—廿）

惡鬼イエスに求ひけるは、命じて底なき所に往しむる勿れ。此に多の豕の羣、山に草を食ひゐたりしが、（路加八〇廿一—廿二）

鬼イエスに求ひて曰ひけるは、若しわれらを逐出さんとならば、豕の羣に入ることを容せ。

彼等に往けと曰ひければ、鬼いでゝ、豕の羣に入りしに、惣のむれ山坡より逸て海にいり、水に死にたり。「其の數約そ二千匹」（馬可五〇十三）

牧者ども逃げゆきて、此事を邑また鄉村に告げければ、衆人其のありし事を視んとて出でイエスに來りて、惡鬼に憑れたる者、すなはちレギヨンを持ちたりし人の衣

服をつけ、慥なる心にて坐し居けるを見て懼れあへり。此事を見て者ども、惡鬼に憑れたりし者の事と豕の事を彼等に告げければ、頓てイエスに其境を出んことを求ひぬ。

イエス船に登んとせしとき、惡鬼に憑れたりし者、ともに居らんことを求ひけれども、イエス許ずして彼に曰ひけるは、爾の家に歸り、親屬に往きて、主の爾に行し大なる事と爾を恤みし事を告げよ。

彼ゆきてイエスの己に行したまへる大なる事をデカポリスに言揚しければ、衆人みな駭きあへり。（馬可五〇十四―廿）

瀕死の兒と惱める婦

イエス船に乘りて復た海の彼岸に濟りしに、大勢の人々彼に集る。イエスは海に近くをれり。

會堂の宰ヤイロといふ人きたり、イエスを見て、其足下に伏し、切々に求ひいひけるは、我いとけなき女死る瀕になりぬ。之を救ん爲めに來りて、手を彼に按きたまへ、然らば女は生くべし。

イエス彼と共に往くとき、衆多の人々、彼に從ひて擁あへり。

爰に十二年血漏を患ひたる婦あり。此婦おほくの醫者の爲めに甚だ苦しめられ、其所有をも盡く費しけれども、何の益もなく、轉て惡しかりしが、イエスの事を聞きて、群集の中より彼の後に來り、その衣に捫れり。是れその衣にだに捫らば、愈るべしと曰へばなり。斯くて血の漏ること直ちにとまり、既に疾いえしと其身に覺えたり。

イエス自ら能力の己れより出たるを知り、おほせいの人々を顧みて曰ひけるは、我衣に捫りし者は誰なる乎。（馬可五〇 廿一—三十）

衆人はみな特に捫れる者なしと曰へり。ペテロおよび偕に在者ども曰ひけるは、師よ衆人なんぢに擁擠せまるに（路加八 〇四五）「我に捫る者は誰ぞと曰へたまふ乎」（馬可五〇 三十一）

イエス曰へけるは、我に捫る者あり、能力の我身より出るを覺ゆれば也。（路加八 〇四六）

イエスこの事を行せる婦を見んと環視しければ、（馬可五 〇廿二）その婦みづから隱くせぬを知り、をの〻き來りて、前に伏し、さはりし故と其たゞちに愈えたることを衆人の前に告ぐ。（路加八 〇四七）

イエス彼に曰ひけるは、女よ、爾の信なんぢを救へり、安然にして往け、なんぢの疾いゆべし。（馬可五 〇廿四）

イエスこの事を言ひをるうちに、會堂の宰の家より、人々來りて曰ひけるは、爾の女すでに死にたり。何ぞ師を煩らはすや。

イエス直ちに其の告ぐる所の言をきゝ、會堂の宰に曰ひけるは、懼るゝ勿れ、たゞ信せよ、（可五〇 廿五、廿六）女は癒ゆべし。（路加八 〇五十）

イエスペテロとヤコブ及びその兄弟ヨハネの外は、誰にも共に往くことを許さゞりき。（馬可五 〇廿七）イエス宰の家に入りしに人々擾亂ぎ（馬太九 〇廿三）いたく哭泣ぶを見る。彼等に曰ひけるは、入らしめよ、何ぞ忙亂ぎかつ哭くや、女は死ぬるに非ず、たゞ寢たる耳。（馬可五〇 廿八—廿九）彼等之の死にたるを知れば、（路加八 〇五三）イエスを哂笑ふ。イエス凡の人々を出し、女の父母とその從へる者等を率きつれ、女の臥したる所に入り、女の手を執りて之に曰ひけるは、タリタクミ之を譯ば、女よ我なんぢに命ず、起きよと

いふ義なり。（馬可五〇　四十—四一）

その魂かへりて（路加八　〇五五）直ちに女おきて行めり。彼は年十二歳なり。彼等はなはだ驚きぬ。イエスこの事を人に知する勿れと嚴く戒め、又女に食物を與へよと命じたり。（馬可五〇　四二—四三）

その名聲あまねく其地に播りぬ。（馬太九　〇廿六）

途上病を癒す

イエス此を去るとき、二人の瞽者したがひて呼び曰ひけるは、ダビデの裔よ我儕を憐れみ給へ。

イエス家に入りしに、瞽者きたりければ、彼等に曰ひたまひけるは、我が此事を行得ると信ずるや。答へけるは、主よ然り。

イエス被等の目に手の按て、爾曹の信ずる如く爾曹に成るべしと曰ひければ、其目ひらけたり。

イエス嚴く戒めて之に曰ひけるは、愼みて人に知らする勿れ。

然れども彼等いで、遍く、其地にイエスの名を播めたり。

瞽者の出るとき、人々鬼に憑れたる啞をイエスに携來りしに、鬼おひ出されて、啞ものいへり。衆人あやしみ曰ひけるは、イスラエルの中にも未だ斯る事は見ざりき。

パリサイの人曰ひけるは、彼鬼の王に藉て、鬼を逐出せる也。（馬太九　〇廿七—廿四）

ガリラヤに福音擴がる

鄕里を訪ふ

イエス此處を去りて（馬可六〇一）、その育ちし所の（路加四〇十六）、「故鄕」（馬可六〇一）ナザレに來り、常例の如く、安息日に會堂に入りて、聖書を讀んとて立ちければ、預言者イザヤの書を予へしに、イエス其書を展きて、斯く錄れたる所を見出せり。

『主の靈われに在す。
故に貧者に福音を宣傳へん事を我に膏を沃ぎて任じ、
心の傷める者を醫し、
又囚人に釋さん事と、瞽者に見させん事を示し、

又壓制らるゝ者を縱ち、
主の禧年を宣播めんが爲めに我を遣せり。』

イエス書を捲き、その役者に予へて坐しければ、會堂に在る者みな目を注て視なせり。

イエス彼等に曰ひけるは、此錄れたる事は今日なんぢらの前に應れり。（路加四〇十六―廿一）衆かれを讚め、その口より出る所の恩惠の言を奇み曰ひけるは（路加四〇廿二）如何して此人に斯くのごとき事あるか、誰より此智慧を授けられて、如此ふしぎなる事をも其手より行すか。彼は木匠に非ずや、マリアの子ヤコブ ヨセ ユダとシモンの兄弟にして、其姉妹も此に我儕と共に在るに非ずや。遂に人々彼に礙けり。（馬可六〇二―三）

イエス彼等に曰ひけるは、爾曹かならず我に諺を引て、醫者みづからを醫せ、我

儕が聞きし所のカペナウンにて行し事を自己の家鄉なる此土にも行べしと云はん。（路加四〇 廿三）

また曰ひけるは、我まことに爾曹に告げん（路加四〇 廿四）、預言者は其故鄉その親戚その家の外に於ては尊ばれざることなし（馬可六〇 四）。われ誠を以て爾曹に告げん。エリヤの時三年と六ケ月天とぢて徧地おほいなる饑饉なりし其時、イスラエルの中に多の嫠ありしかど、エリヤは其一人へだに遣されず、只シドンなるサレパタの一人の嫠に遣されたり。また預言者エリシヤの時に、イスラエルの中に多の癩病ありしかど其一人だに潔られず、惟スリヤのナーマンのみ潔められたり。

會堂に在りし者これを聞きて大に憤ほり、起つてイエスを邑の外に出し、投下さんとて其邑の建たる山の崖にまで曳往けり。然るにイエス彼等の中を徑行て去りぬ。（路加四〇 廿五―卅）

イエス彼處にて患者に手を接け、たゞ數人を醫し、外ふしぎなる事を行すこと能はざりき。（馬可六〇 五）

村々にて敎ふ

イエス遍く鄉邑を廻り、其會堂にて敎へをなし、天國の福音を宣傳へ、民の中なる諸の病すべての疾を愈せり。牧者なき羊の如く衆人なやみ、又流離になりし故に之を見て憫みたまふ。

其のとき弟子等に曰ひ給ひけるは、收穫は多く、工人は少し。故に其穫主に工人を收穫場に送らんことを願ふべし。（馬太九〇 三五―三八）

十二人を送る

イエス十二の弟子を召びて、彼等を二人づゝ遣はさんとして、之に惡鬼を逐出し（馬可六〇七）、又凡ての病、すべての疾ひを醫す權威（馬太十〇一）、と能力を授けたゝ（路加九〇一）。また彼等に命じけるは（馬可六〇八）、異邦の途に行くなかれ。又サマリア人の邑にも入るなかれ。惟イスラエルの家の迷へる羊に往け。往きて天國近に在りと宣傳へよ。病の者を醫し、癩病を潔し、死たる者を甦らせ、鬼を逐出すことをせよ。爾曹價ひなしに受けたれば、亦價ひなしに施すべし。

爾曹金または銀または錢を貯はへ帶る勿れ。「一の杖の外に旅の用意に何をも携つなかれ、旅袋糧食を携へず」（馬可六〇八）、二つの衣、履を持たず、「只草履を穿けよ」（馬可六〇八）そは工人の其食物を得るは宜なり。凡そ鄉邑に至らば、其中の好人を訪ねて出るまでは此處に留れ。人の家にいらば、其平安を問へ。その家もし平安を得べき者ならば、爾曹の願ふ平安は其家に至らん。若し平安を受くべからざる者ならば、爾曹の願ふ平安は爾曹に歸るべし。もし爾曹を接ず、爾曹の言を聽ざる者あらば、其家または其邑を去るとき足の塵を拂へ。われ誠に爾曹に告げん。審判の日到らばソドムとゴモラの地は此邑よりも却つて易からん。（馬太十〇九―十五）

われ爾曹を遣すは、羊を狼の中に入るが如し。故に蛇の如く智く、鴿の如く馴良かれ。愼て人に戒心せよ、蓋は、人なんぢらを集議所に解し、又その會堂にて鞭つべければ也。又わが緣故に因て、侯伯および王の前に曳るべし。是かれらと異邦人に證をなさんが爲めなり。人なんぢらを解さば、如何なにを言はんと思ひ煩らふ勿れ。其とき言べき事は爾曹に賜るべし。是なんぢら自ら言に非ず、爾曹の父の靈その衷に在て言ふなり。兄弟は兄弟を死に付し、父は子を付し、子は兩親を訴へ、

且これを殺さしむべし。又なんぢら我名の爲めに凡の人に憎まれん。然れど終まで忍ぶ者は救はるべし。この邑にて人なんぢらを責めなば、他の邑に逃れよ。我まことに爾曹に告げん。爾曹イスラエルの諸邑を廻盡さゝる間に人の子は來るべし。弟子は師より優らず、僕は主より優らざる也。弟子は其師の如く、僕は其主の如くならば足りぬべし。若し人主を呼びてベルゼルフと云はゝ、況て其家の者をや。是故に彼等を懼るゝ勿れ。そは掩はれて露はれざる者なく、隱れて知られざる者なければ也。われ幽暗に於て爾曹に告げしことを光明に述べよ。耳をつけて聽きしことを屋上に宣播めよ。身を殺して魂を殺すこと能はざる者を懼るゝ勿れ、唯なんぢら魂と身とを地獄に滅し得る者を懼れよ。二羽の雀は一錢にて售るに非ずや。然るに爾曹の父の許しなくば其一羽も地に隕ること有らじ。爾曹の頭の髮また皆かぞへらる。故に懼るゝ勿れ、爾曹は多くの雀よりも優れり。然れば凡そ人の前に我を識ると言はん者を我も亦天に在す我父の前に之を識ると言はん。人の前に我を識らずと言はん者を我も亦天に在す我父の前に、之を識らずと言ふべし。（馬太十〇十六—廿三）われ火を地に投入れん爲めに來れり。我なにをか欲む、已に此火の燃たらん事なり。われ受くべきのバプテスマあり。其の成遂らるゝ迄は我が痛みいかばかりぞ乎。（路加十二〇四九—五十）地に泰平を出さん爲めに我來れりと意ふなかれ。泰平を出さんとに非ず、刃を出さん爲めに來れり（馬太十〇廿四）。今よりのち一家に五人あらば、三人は二人に敵對し、二人は三人に敵對して分るべし（路加十二〇四二）。夫れわが來るは、人を其父に背かせ、女を其母に背かせ、媳を其姑に背かせんが爲めなり。人の敵は其家の者なるべし。我

よりも父母を愛しむ者は我に協ざる者なり。我よりも子女を愛しむ者は我に協ざる者なり。その十字架を任て我に從はざる者も、我に協ざる者なり。その生命を得る者は之を失ひ、我ために生命を失ふ者は之を得べし。

爾曹を接る者は我を接る也。また我を接くる者は我を遣はし〻者を接くるなり。預言者なるを以て、その預言者を接くる者は預言者の報賞をうけ、義人なるを以て、その義人を接くる者は義人の報賞を受く。わが弟子なるをもて、小き一人の者に冷なる水一杯にても飲する者は、誠に爾曹に告げん必ず其報賞を失はじ。(馬太十〇廿五—四二)

弟子いで〻偏く諸郷にゆき、福音を宣傳へ、かつ病を醫せり。(路加九〇六)

また多くの惡鬼を逐出し、又多の病る者に膏を沃て醫しぬ。(馬可六〇十三)

斯してイエスは道を敎へ廣めんがために、此處を去れり(馬太十一〇一)、凡そイエスの至るところ、或は郷、あるひは邑、あるひは村、その街市に病る者を置て、彼に其衣の裾にだに捫らせ給へと求へり。乃ち捫らほどの者はみな愈たり。(馬可六〇五六)

其ころ分封の君ヘロデイエスの聲名を聞て、その僕に曰ひけるは、是れバプテスマのヨハネなり。彼死よりゝ甦りたり。故に異なる能を行ふなり。(馬太十四〇十—二)

或人は之をエリヤなりといひ、或は往昔の預言者の如き預言者なりと曰ふ。

ヘロデ之を聞きて曰ひけるは、是れわが首斬し所のヨハネ也しかれ死より甦りたる也。(馬可六〇十五—十六)

ヘロデ彼を見んことを欲せり。(路加九〇九)

カペナウムの危機

五千人を養ふ

使徒等歸り來りて（路加九〇十）、イエスの許に集りて、行へる事と敎し事とを悉く彼に告ぐ。（馬可六〇卅）

今やユダヤ人の踰越の節に近し（約翰六〇四）、イエス彼等に曰ひけるは、爾曹衆を避けて、我と偕に暫く寂寞ところに往きて休むべし。是れ往來のもの多くして、食する暇も無かりしが故なり。（馬可六〇卅一）

かれら人を避け、船にて寂寞ところに往けり。其往くを見て、衆人おほくイエスをしり、諸邑より步行にて趨り、彼等の往かんとする所へ先ち往きて、イエスの許に集れり。（馬可六〇卅二。卅三）

イエス出て、多の人を見（馬可六〇卅四）、これを接て、神の國の事を語り、かつ醫を求る者を癒し（路加九〇十一）、彼等が牧者なき羊の如き者なるに因りて、之を憫めり。（馬可六〇卅四）

日昃くとき、十二の弟子きたりて、イエスに曰ひけるは、此は野なれば、衆人を去せ、四圍の鄕村へゆきて宿をとりて、食を覓る事を爲せたまへ。（路加九〇十二）

イエス彼等に曰ひけるは、人々往かずとも可し。爾曹之に食を予へよ。（馬太十四〇十六）

ピリポ答へけるは、銀二百のパンも人ごとに少しづゝ、予へてなほ足ざるべし。（約翰六〇七）

イエス彼等に曰ひけるは、パンは幾何ある往きて視よ。（馬可六〇卅八）

弟子の一人、即ちシモンペテロの兄弟アンデレイエスに曰ひけるは、此に一人の童

子あり、麰麥のパン五と小き魚二を有てり、然れどこの許多の人に如何すべきぞ。（約翰六〇八―九）

イエス曰ひけるは、其を此に携來れ。（馬太十四〇十八）

イエス衆の人を組々にして、青草の上に坐らしめよと命じければ、或は百人、或は五十人づゝ、列坐せり。イエスその五のパンと二の魚をとり、天を仰ぎ謝して、パンをわり、弟子に與へて、人々の前に陳しむ。又二の魚を每人に分與ぬ。衆人みな食ひて飽き、そのパンと魚の餘屑を拾ひしに、十二の筐に盈たり。パンを食ひたる男、およそ五千人なりき。（馬可六〇卅九―四四）

人々イエスの行し奇跡を見て、此は誠に世に臨るべき預言者なりと曰ふ。（約翰六〇十四）

是に於てイエス彼等が來り、己を執りて、王に爲さんとするを知り（約翰六〇十五）その弟子

を強て船にのせ、向の岸へ先に渡しむ。斯くて衆人を歸しければ、祈禱せんとて密に山に上り、日暮れて獨りそこに在せり。（馬太十四〇廿二―廿三）

耶蘇湖上を歩む

『弟子等』（約翰六〇十六）カペナウンに向ひて海を濟る。既に暮れけれども、イエス彼等に就ず、狂風ふくに因りて漸に海あれ出せり。夜の四時頃、（馬太十四〇廿五）一里十町ばかり漕出せる時、イエスの海を行み、船に近くを見たり。（約翰六〇十七―十九）弟子其の海の上を歩めるを見て驚き、こは變化の物ならんと曰ひて、懼れ叫びたり。（馬太十四〇廿六）

イエス頓て彼等に曰ひけるは、心安かれ、我なり。懼るゝ勿れ。

ペテロ答へて曰ひけるは、主よ若し爾ならば、我に命じ水を履みて爾の所に至しめよ。

來れと言ひたまふ。

ペテロ船より下りてイエスの所に至らんとて、浪の上を歩みたれど、風の烈しきを見て、懼れ沈みかゝりければ、主よ我を救たまへと言ふ。

イエス頓て手を伸べ、之を執へて曰ひけるは信仰うすき者よ、何ぞ疑ふや。偖に舟に登りければ、風しづまりぬ。（馬太十四〇廿七—廿二）

彼等心の中に駭き異めること甚だし。是れ其心の愚頑に因りて、パンの奇跡をも覺らざりし也。

既に濟りて、ゲネサレといふ地に到りて舟泊せり。彼等舟より出しに、頓て人々イエスを知りて、徧く其四方の地へ馳ゆき、病る者を床の儘にて舁ひ、イエスの在す處々を聞出して之に就り。（馬可一六〇五一—五五）

人民の失望

明日かなたの海岸に立ちし人々、昨日弟子の登りし舟の外には舟なく、且イエスは弟子と偕に舟に登らず、弟子のみ往けるを知る。此時テベリアより外の舟きたり、主の祈りて人々にパンを食しゝ所の近くに着けり。人々イエスの此に在ず、弟子も亦在らざるを見て、彼等も舟に登り、イエスを尋ねん爲めにカペナウンに至れり。湖の前岸にて、彼に遇ひ、曰ひけるは、ラビ何時こゝに來り給ひし乎。

イエス答へて曰ひけるは、誠に實に爾曹に告げん。爾曹の我を尋るは、休徵を見し故に非ず。たゞパンを食して飽きたるが故なり。なんぢら壞る糧の爲めに勞かずして、永生に至る糧、すなはち人の子の予ふる糧の爲めに勞くべし。蓋父の神かれに印して證すれば也。

是に因りて人々イエスに曰ひけるは、我儕如何なる事を行さば神の工に爲るべき乎。

イエス答て彼等に曰ひけるは、神の遣し丶者を信ずるは即ち其なり。

彼等いひけるは、我儕をして爾を信せしむる爲めに、何の休徴を爲して我儕に示るや。何の工を行ふや。我儕の先祖野にてマナを食へり、錄して天よりパンを彼等に賜へて食はしむと有るが如し。

イエス曰ひけるは、誠に實に爾曹に告けん。天よりパンを爾曹に賜へし者はモーセに非ず、今わが父は天より眞のパンをもて爾曹に賜ふ。神のパンは天より降りて、生命を世に賜ふるもの也。彼等いひけるは、主よ恒に其パンを我儕に予へよ。

イエス曰ひけるは、我は生命のパンなり。我に就る者は餓ず。我を信ずる者は恒に渴ことなし。然れど我なんぢらが我を見ても信せざる事を爾曹に告げたりき。凡て父の我に賜へし者は我に就らん。我に就る者は我かならず之を棄ず。わが天より降りしは己の意の任を行はん爲めに非ず、我を遣はし丶者の意のま丶を行なはん爲めなり。凡て父の我に賜へし者をわれ一をも失はず。末日に之を甦へらす、即ち我を遣し丶父の意なり。凡そ子を見て、之を信ずる者は永生を得。われ復これを末の日に甦らすべし。是れわれを遣し丶者の意なればなり。

是に於てユダヤ人等イエスの我は天より降りしパンなりと言ひしことにつき、譏きいひけるは彼が父母は我儕の識るところならずや。即ち彼はヨセフの子イエスに非ずや。然るに何ぞ、我は天より降りしと言ふや。

イエス答へて曰ひけるは、爾曹たがひに譏くこと勿れ。我を遣し丶父、もし引ざれば、人よく我に就るなし。我に就りし人は、末日に我これを甦らすべし。預言者

の書に、人みな教を神に受けんと錄されたり。是故に凡て父より聽て學びし者は我に就る。然れど父を見し者はなし、惟神より來る者のみ之を見たり。誠に實に我なんぢらに告げん。我を信ずる者は永生あり。我は生命のパンなり。爾曹の先祖は野にてマナを食ひしかど死ねり。凡て食ふ者をして死ざらしむる者は天より降れるパンなり。我は天より降りし生るパンなり。若し人此パンを食はゞ窮なく生くべし、我あたふるパンは、我肉なり。世の生命の爲めに我これを賜へん。

爰にユダヤ人たがひに爭ひ曰ひけるは、此人いかで其肉を我儕に賜へて食はしるむる事を得ん乎。

イエス曰ひけるは、誠に實に爾曹に告げん。若し人の子の肉を食はず、其血を飲ざれば、爾曹に生命なし、わが肉を食ひわが血を飲む者は永生あり。我末の日に

之を甦らすべし。夫わが肉は誠の食物、また我血は誠の飲物なり。わが肉を食ひ、我血を飲む者は、我にをり我も亦かれに居る。生る父我を遣す、父に由て我生る如く、我を食ふ者も我に由て生べし。これ天より降れるパンなり、爾曹の先祖が食ひたれど尙死し、マナの如きものに非ず、此パンを食ふ者は窮りなく生べし。

此等の事はイエスカペナウンの會堂にて敎へを爲せるとき言ひし所なり。

弟子等のうち、多の人これを聞きて曰ひけるは、此は甚しき言なり。誰か能くこれを聽かんや。

弟子の此言について譏くを、イエス自ら知りて彼等に曰ひけるは、此言に因て礙く乎。もし人の子の故の處に升を見ば如何。生命を賜ふる者は靈なり、肉は益なし。我なんぢらに曰ひし言は、靈なり生命なり。然れど爾曹の中に信ぜざる者あり。夫

れイエスの如此いへるは、信ぜざる者は誰、おのれを賣す者は誰といふ事を元始より知ればなり。

イエスまた曰ひけるは、是故に我さきに我父あたへざれば、人よく我に就るなしと言ひしなり。

此後その弟子、おほく返り往きてイエスと偕に行ざりき。之に因てイエス十二の弟子に曰ひけるは、爾曹も亦去らんと意ふや。

シモンペテロ答へけるは、主よ我儕は誰に往んや。永生の言を有てる者は爾なり。又われら信じて知る。なんぢは活る神の子キリストなり。

イエス彼等に答へけるは、我なんぢら十二人を簡びしに非ずや。然れど其中の一人は惡魔なり、此はシモンの子イスカリオテのユダを指して言へるなり。彼は十二の一人にしてイエスを賣さんとする者なり。（約翰六〇廿二—七一）

傳習の拒否

パリサイの人と或る學者たちエルサレムより來りて、イエスの前に集り、彼の弟子の中に潔らざる手即ち盥ざる手にてパンを食する者ありしを見て、之を責めたり。蓋パリサイの人とユダヤの人々は、みな古の人の遺傳を守りて、其手を潔あらはざれば食せず、市より歸きたりて盥ざれば、亦食せず、此ほか杯椀鍋および牀を洗ふなど多端の遺傳を受守れり。

是に於てパリサイの人と學者等イエスに問ひけるは、爾の弟子は何ゆゑ古の人の遺傳に遵はずして、盥ざる手を以てパンを食するか。

イエス答へて彼等に曰ひけるは、イザヤは僞善者なる爾曹を指してよく預言せり。

其錄し、言に、

『此民は唇にて我を敬へども、
其心は我に遠かり、
人の誡を教と爲して、
徒らに我を拜す。』

と言へり。夫れ爾曹は神の誡を棄て、人の遺傳を守れり。即ち鍋杯を洗ひ、おほく此の如き事を行ふ。

また彼等に曰ひけるは、爾曹は實に己の遺傳を守らんとて能くも神の誡を棄る者なり。モーセ曰ひけるは、爾の父母を敬へ、又父あるひは母を罵る者は殺さるべしと。然れど爾曹は曰ふ。もし人、父あるひは母に對ひて、爾を養ふべき物はコルバン、即ち禮物なりと曰はゞ事へずとも可しと。而して人の其父あるひは、母の爲めに何をもする事を爾曹許さず。斯くなんぢらは其敎ふる所の遺傳をもて、神の道を廢うす。又おほく此類の事を行ふ。

イエスまた衆庶を召て、彼等に曰ひけるは、爾曹みな我言を聞きて悟れ。外より人に入るものは人を汚すこと能はず、然れど人より出るものは人を汚す也。（馬可七〇一—十五）

弟子きたりてイエスに曰ひけるは、パリサイの人この言を聞きて厭ひ棄るを、爾知れるか。

答へて曰ひけるは、我が天の父の植ゑざる者はみな拔るべし。彼等を棄おけ。瞽者の相する瞽者なり。若しめしひのもの瞽者の相せば、二人とも溝に落べし。

（馬太十五〇十二—十四）

イエス衆庶を離れて室に入りしに、其弟子たとへの意を問へり。彼等に曰ひけるは、爾曹もなほ悟ざるか、凡そ外より人に入るもの、人を汚し能はざる事を知ざる乎。蓋その心に入ず、腹に入りて、厠に遺つ。すなはち食ふ所のもの潔れり。

又曰ひけるは、人より出るものは是れ人を汚す。人の心より出るものは、惡念、姦淫、苟合、兇殺、盜竊、貪婪、惡慝、詭譎、好色、嫉妬、謗讟、驕傲、狂妄なり。是等の惡行はみな内より出て人を汚すもの也。（馬可七〇十七—廿三）されど手を洗はずして食ふは人を汚さず。（馬太十五〇廿）

パリサイ人の陰謀

また一の安息日に、イエス會堂に入りて教ふ。此に右の手枯たる人ありければ、學者とパリサイの人、イエスこれを安息日に醫すならんかと窺ひぬ、蓋かれを訴へんと欲へばなり。

イエスその意を知りて、手なへたる人に、起きて中に立てよと曰ひければ、其人おきて立てり。

イエス曰ひけるは、我なんぢらに問はん。安息日に善を行すと惡を行すと、又生るを救くると殺すと孰れをか行すべき。（路加六〇六—九）彼等に曰ひけるは、爾曹の中に一の羊を有てる者あらんに、若しその羊、安息日に坑に陷しらば、之を挈上ざる乎。人は羊より優るゝこと、幾何ぞや、然れば安息日に善を行すは宜し。（馬太十二〇十一—十二）彼等默然たり。イエス怒を含みて、環視し、彼等が心の頑梗なるを憂へ、手枯たる人に爾の手を伸よと曰ひければ、彼その手を伸しゝに、（馬可三〇四—五）即ち他の手のごと

く全く愈たり。（馬太十二〇十三）

彼等大に怒りて、如何にイエスを處さんと互に議りあへり。（路加六〇十一）

パリサイの人出でて、如何にしてかイエスを殺さんと、直ちにヘロデの黨に相謀りぬ。（馬可三〇六）

耶蘇の隱退

ガリラヤ外の傳道

ホエニシアに往く

イエス此を去りて、ツロとシドンの地に往き、（馬太十五〇廿一）家に入りて人に知れざらん事を欲ひしが、隱れ得ざりき。そは惡鬼に憑れたる幼き女を有てる婦、イエスの事を聞きて來り、其足下に伏したるに因りてなり。この婦はサイロピニケにうまれしギリシヤの者なり。（馬可七〇廿四—廿五）

婦いでゝ呼はり、曰ひけるは、主よ、ダビデの裔よ、我を憫み給へ、我むすめ鬼に憑れて甚く苦しめり。

イエス一言も彼に答へざりしかば、其弟子きたり請ふて曰ひけるは、我儕の後より呼はるが故に彼を去らせ給へ。

答へて曰ひけるは、イスラエルの家の迷へる羊の外に我は遣はされず。

婦きたり拜して曰ひけるは、主よ我を助けたまへ。（馬太十五〇廿二—廿五）

イエス彼に曰ひけるは、先づ兒女に飽しむべし。兒女のパンを取りて、犬に投ぐる

は善らず。婦こたへて曰ひけるは、主よ、然り、されど犬も案の下に在りて兒女の遺屑を食らふ也。（馬可七〇廿七—廿八）

遂にイエス答へて曰ひけるは、婦よ、爾の信仰は大なり。願の如く爾に成るべし。（馬可十五〇廿八）此言に因りて歸れ、惡鬼は爾の女より出でたり。婦その家に歸りしに、女牀に臥して、惡鬼既に出でたるを見る。（馬可七〇廿九—卅）

奇跡と象人

イエス、ツロとシドンの地を去りて、デカポリスの地を過ぎ、ガリラヤの海に至れり。（馬可七〇卅一）

彼は山に登りて坐せり。多の人々、跛者、瞽者、瘖者、殘缺者および各樣の疲病ある者を伴ひきたり、イエスの足下に置きければ、即ち之を醫しぬ。是に於て瘖者は

ものいひ、殘疾はいえ、跛者はあゆみ、瞽者は見えたるを人々見て奇しみ、イスラエルの神を榮たり。（馬太十五〇廿七—卅一）

人々聾の訥る者をイエスに携來りて、手を按給はん事を救ひければ、イエス衆人を離れ、之を外へ携れゆき、指を其耳にさしいれ、又唾して其舌に捫り、且天を仰ぎて嘆じ、其の人に對ひてエッバタと曰ふ。これを譯けは啓けよとの義なり。直に其耳ひらけ、舌の絡ゆるみて、正しく言へり。イエス之を人に告ぐる勿れと、彼等を戒しむれば戒しむるほど、益言揚しぬ。衆人はなはだしく駭きて曰ひけるは、此人の行し所、ことゞく善し、あるひは聾を聽えさせ、或は啞者を言はしめたり。（馬可七〇卅二—卅七）

四千人を養ふ

當時あつまれる人々甚だ多かりしが、何の食物も有らざりければ、イエス其弟子を召びて曰ひけるは、我この多くの人々を憫れむ。既に三日われと共に居りしゆゑ、今なにも食物なし。もし飢しまゝ其家に歸さば、途間にて憊まん。其中に遠處より來れる者あれば也。

その弟子かれに答へけるは、此野にて何處よりパンを得、この人々を飽しめん乎。

イエス彼等に問ひけるは、パン幾何あるや。七と答ふ。

イエス人々に命じて、地に坐せしめ、七のパンを取りて謝し、之をわり、人々の前に陳しめんが爲め、その弟子に與へければ、即ち人々の前に陳り。また小き魚を些須もてり、之をも祝して、人々の前に陳けと曰ふ。人々これを食ひて飽き、其餘屑を七の籃に拾へり。之を食へる者『婦と子供の外に』（馬太十五 〇卅八）おほよそ四千人なり

（馬可八 〇 一—九）

イエス人々を去しめ、船に登りてマグダラの境に至れり。（馬太十五 〇卅九）

表徵の要求

パリサイと『サドカイ』（馬太十 六〇一）の人いでゝ、彼を試みんがため、天よりの表徵を求めて、詰りはじむ。（馬可八 〇十一）

彼等に答へけるは、爾曹暮には夕紅に由りて晴れならんと言ひ、晨には朝紅また曇に由りて今日は雨ならんといふ。僞善者よ。空の景色を別つことを知りて、時の表徵を別ち能はざる乎。（馬太十六 〇二—三）

イエス心の中に深く歎息して曰ひけるは、此世の人なんぞ表徵を求むるや。誠に我なんぢらに告げん。表徵は此世の人に必ず與へられじ。

イエス彼等を離れて、復船に乗り、むかふの岸に濟れり。（馬可八〇十二—十三）

何ぞ悟らざるや

さて弟子パンを携さふることを忘れ、たゞ一のパンのみ船に有りき。イエス彼等を戒しめて曰ひけるは、戒心してパリサイの人の麪酵とヘロデの麪酵を愼しめよ。弟子たがひに論じて曰ひけるは、是れパンを携さへざりし故ならん。（馬可八〇十四—十六）

イエスこれを知りて曰ひけるは、信仰うすき者よ、何ぞ互にパンを携へざりしことを論ずる乎。未だ悟らざるか。（馬太十六〇八—九）また覺ざる乎。我れ五千人に五のパンを擘りあたへし時、その餘屑を幾籃ひろひしや。答へけるは十二なり。又四千人に七のパンを擘りあたへし時、その餘屑を幾籃ひろひしや、答へけるは七なり。（馬可八〇十七—廿）

イエス彼等に言ひけるは（馬可八〇廿一）パリサイとサドカイの人の麪酵を愼しめとは、パンにつきて言へるに非ざるを何ぞ悟らざる。是に於て、弟子その麪酵にはあらで、パリサイとサドカイの人の教を謹めと言へるなるを悟れり。（馬太十六〇十一—十二）

盲人を癒す

イエスベラサイダに至りければ、人々瞽者を携來りて、之に手を按けたまはん事を求へり。イエス瞽者の手を執りて、村の外へ携出で、その目に唾して手を彼に按げとひけるは、何か視ゆるや。

瞽者目を擧げて曰ひけるは、我この人々の歩行を見るに樹の如し。

遂にイエスまた兩手を彼の目に按け、その目を擧げさせければ、乃ち愈えて庶物あきらかに視えたり。イエス彼を其家に歸らせ、曰ひけるは、此村に入るなかれ、

且この村人にも告ぐる勿れ。（馬可八〇廿二—廿六）

救主耶蘇

ペテロの告白

イエスその弟子と共に、カイザリヤ、ピリピの諸村へゆく。（馬可八〇廿七）

イエス衆の在らざりしとき、祈禱したりしが、弟子も偕に居れり。イエス之に問ふて曰ひけるは、衆人は我を言ひて誰と爲るか。答へて曰ひけるは、バプテスマのヨハネ或ひはエリヤ、「或ひはエレミヤ」（馬太十六〇十四）或は古の預言者の一人の甦へれるなりと。

イエス曰ひけるは、爾曹は我を言ひて誰とするか。（路加九〇十八—廿）

シモンペテロ答へけるは、爾はキリスト、活る神の子なり。

イエス答へて彼に曰ひけるは、ヨナの子シモンよ、爾は福なり。蓋血肉なんぢに示めせるに非ず。天に在す吾父なり。我また爾に告げん。爾はペテロなり。我が教會をこの磐の上に建つべし。陰府の門は之に勝つべからず。又われ天國の鑰を爾に予へん。爾が地に於て繋ぐことは、天に於ても繋ぎ、なんぢが地に於て釋く事は、天に於ても釋くべし。

遂に其弟子を戒しめけるは、我をキリストと人に告ぐると勿れ。（馬太十六〇十六—廿）

十字架預告

此時よりイエス其弟子に己のエルサレムに往きて、長老祭司の長學者等より多の苦しみを受け（馬太十六〇廿一）棄られ、且殺されて、三日の後に甦へることを彼等に示めし始めたまへり。（馬可八〇廿）

明に之を示し給ひしかば、ペテロイエスを援き、諫めて（馬可八〇廿二）主よ宜らず此事爾に來るまじと曰へり。（馬太十六〇廿二）

イエス回顧り、その弟子を見て、ペテロを戒しめ曰ひけるは、サタンよ我が後に退け『爾は我に礙づく者なり』（馬太十六〇廿三）爾は神の情を思はず、反つて人の情を思ふ。（馬可八〇廿三）

衆人と其弟子を共に召びて彼等に曰ひけるは、若し我に從がはんと欲ふ者は、己を棄て、その十字架を負ひて我に從へ。そは生命を全うせんとする者は之を喪なひ、我ため且福音の爲めに生命を喪ふ者は之を得べければ也。もし人全世界を得るとも其生命を喪はゞ何の益あらん乎。また人何をもて其生命に易へんや。姦惡なる此世に於て、我と我道を恥る者をば、人の子も亦聖使と共に、父の榮光をもて來る時之を恥べし。イエスまた彼等に曰ひけるは、我まことに爾曹に告げん。此に立つものゝ中に、神の國の權威をもて來るを見るまでは死ざる者あり。（馬可八〇廿四—九〇一）

變貌

此事を言ひけるのち、八日ばかり過ぎて、イエスペテロヨハネヤコブを携ひ、祈禱せんとて山に登れり。祈れる時に（路加九〇廿八—廿九）彼等の前にて其容貌かはり、其面日の如く輝き（馬太十七〇二）、その衣も耀めきて（馬可九〇三）、白きこと光の如く（馬太十七〇二）、世の中の布さらしも、かく白くは爲し能はざるべし（馬可九〇三）。

二人の人ありて之と言へり。即ちモーセとエリヤ也。榮光の中に現はれて、イエスのエルサレムにて既や世を逝らんとする事を語る。ペテロおよび偕に在りし者等いたく寢りたりしが已に醒めて、イエスの榮光また偕に立る二人を見たり。

この二人のイエスと別るゝ時、ペテロイエスに曰ひけるは、師よ此に居るは善し。われらに三の廬を建せ給へ。一は爾のため、一はモーセのため、一はエリヤの爲めにせん。此は其言ふところを知ざりし也（路加九〇廿—廿三）。

かく言へる時、かゞやける雲かれらを蔽ふ（馬太十七〇五）その雲に入りし時弟子たち懼れぬ（路加九〇廿四）

聲雲より出でて、言ひけるは、此は我が旨に適ふ、わが愛子なり。爾曹これに聽くべし。弟子これを聞きて、大におそれ、倒ふれ伏したり。イエス來りて、彼等に手を按け、おきよ、懼るゝ勿れと曰へり。（馬太十七〇五—七）

頓て弟子、環視ければ、イエスと己の外は一人をも見ざりき。

山を下る時に、イエス彼等に命じて、人の子の死より甦る迄は、爾曹の見し事を人に告ぐる勿れと曰へり。

弟子等この言を守り、かつ互に論じ曰ひけるは、死より甦ると云ふは何の事か。彼等イエスに問ふて曰ひけるは、エリヤは前に來るべしと學者の曰へるは何ぞや。

イエス答へて曰ひけるは、實にエリヤは前に來りて、萬事を復たむ。また人の子に就ては、其各樣の苦難を受け、かつ輕慢らるゝ事を書しるされたり。然れど我なんぢらに告げん、エリヤ既に來りしに、彼に就て錄されたりし如く、人々意の任に之を待へり。（馬可九〇八—十三）

癲癇の子供

イエス弟子等の所にきたり、多の人々の彼等を環圍めると、學者たちの彼等と論じをりしを見たり。衆人たゝちに彼を見て、駭き趨りよりて禮をなせり。イエス學者